

た。

著者は暫時古本を調べてから、一寸腰を下ろして雑話を始めたが、女主人は彼の猫を指して、私の家には猫は育たぬのに、此奴は不思議に無事であつて能く益をし、私は獨身者で、毎日のやうに半日位は戸を閉て出かけるのに、屹度した良い留守番をしてくれます。歸つて見ると、初から火鉢の横に敷いてある布團の上に坐つたり、些も外へ行かずに番をして居り、それに人の言葉を能く聽分けて伶俐な猫です。其から又私の家には別にタヌが居つて私を保護してくれまうと言つた。

タヌの一言に耳をそばだてた著者はタヌとは何ですかと訊ねると、狸のことです、妙な來歴がありますと答へて、如才なく左の事實を語つてくれた。

猫に化ける狸家は以前には此所から少し上手で、今は空地になつて居ますが、其所の可なり大きい古い家でした。最初は貸家であつたので、種々な人が住つて見たけれど一人として永續きが出来ず、中には三日目や四日目に周章て出て行きますの

で、近所では狸屋敷だの、化物屋敷だのと言出し、屋賃もドツサリ下りましたから何が出ようと構はんと言つて、私の父親の八太郎が借りて住みましたところ、別に何の事もないので、どうしたもので、今まで他人が居着なかつたらうと不審に思ひ、前に住んだ人に會つて訊ねて見ようと思つても、何所に轉宅をしたのか、薩張り解らず、漸くのことタツタ一人、私方のツイ前に借りて居た人に會うて訊きますと、或夜寢床から起きて煙草を吸はうと思ひ、煙管で火盆を引寄せようとする、次の室から、炭團が火の玉になつて獨りで轉げて來たので、翌日他へ逃出したと、ことを聞いただけでした。私方ではそんな恐しいものは一度も出ませぬが、唯夜になると、何所からともなく、裏の庭から縁側の上へ、能く猫が來るのでした。

私の一家は誰も活物が好きですから、猫が來たのを知ると必ず魚の切れを投げてやるのが習慣になりましたが、奇妙なことには、私どもが起つて縁側へ出ると、猫はフイと庭へ飛下りる。どんなに早く障子を開けて縁へ出て見ても、二度と姿が見へ

ません。縁側の下は板で圍つてあつて、床の下へ潜る穴は一つもないし、庭にも別に隠れる場所もなし、又猫が庭の板壁を飛超へて裏へ逃げた形跡なども曾て無いので、是だけは家の不思議になつてゐました。

又モウ一つの不思議は、猫は全身眞白なものと、白と黒との斑の二疋が来るのですが斑の猫は、出る度毎に斑の紋様が違ふのです。頭が黒くて胴が白かつたり、尾が黒くて頭が白かつたり、又は頭と尾とが白くて胴に黒斑があつたり、其は／＼奇妙でした。

父親も、是は變だなアと言ひ出しましたが、此外には何の奇怪も不都合もないのですから、安心して住つて居ると、或夜、父が夢を見たさうで、翌朝私どもに對つてオイ昨宵枕上に立つたが、猫では無いぞ狸だぞよと言ひました。其から父は、狸の怒りにふれてはならぬ、何でも食物を與つて機嫌を取るのだとて、来る度毎に食物をやるのでしたから、後には磯淵は狸を飼つてゐると言はれ出し、父は『八狸』と云

ふ綽名を付けられました。

傘の出沒 然るに、追々と家に怪異が出るやうになりました。尤も怪異と云つても禍ひではありません、悪戯や利益になる怪異なのです、一例を申すと、今が今まで其所にあつた物が突然見へなくなつたり、又突然現はれたりすることですが、此は狸の所爲だと思ふから別に恐れはしません。

又家族の誰かが餘所行きをする時に、突然と雨傘が出て來ます。今日はお天氣で雨などの降る日ではなさうなのに、誰が傘を出したのか邪魔臭いと云つて、傘棚へ上げて出て行くと、其日に雨が降り出して歸りに難儀をする。又反對に雨の降りさうな日に傘の用意をすると、いつとなく傘が見えなくなつてゐるので、已むを得ませんから他の傘を持つて出て行くと、後でアカ／＼と照りつく晴天となると云ふやうなことが何度もありましたので、後には怪異の心を知つて、晴雨の外出に大層便利を感じました。

保○險○屋○の○閉○口○ 或る日、大阪で、生命保険の勧誘員をして居る下村と云ふ若い人が見えまして、オイ近頃八狸の評判が大分高くなつて大阪へも知れて来たが、今の世に狐だの狸だのと、そんな馬鹿々々しい迷信に捉へられてすむものか、此家で傘が出たり隠れたりするナンテ、其は老人どもが、今自分が仕たことを忘れて、其を怪異と思つて騒ぐのだ。雨が降つたり止んだりするのは、傘の出たり引込んだりするのに偶然的合したのに過ぎない。狸などの野獸が第一、都會の市街に住むなんて道理があるものかとて、私や母やを大貶しに貶いて立歸らうとすると、其人の靴の片つらが何所へどうなつたか見えないので、下駄を借りたいと言はれます。

私等は總がかりで捜しましたが見つかりません。此時は父は死亡なくなつて居り私等母子三人皆女ばかりで下駄を貸さうにも男の履物がないので皆が困りましたが、母がヒョイと裏口の雪隠の屋根の上を見て、オヤ／＼あそこに靴が一つある、あれでは無いかと指ゆびさしますから下村さんは、其だ／＼と言つて、竹棹で取りました。下村さんは此一

件で閉口し、自分が狸を貶したので仇を打たれたと頭を掻いて行きました。

飼○猫○が○皆○死○ぬ○る○ 私方は其家に十三年ばかり住みましたが、誰も一度もたしかに狸の正體を見た者がありません。唯何年も何年も例の裏から縁へ来る猫の姿をチラリと見かけるばかりです。併し自分の家の飼猫ではないので何となく物足らない氣持がするから、他から飼猫を譲り受けて何度も飼つて見ましたが、どの猫も皆黄色い唾を吐いて死しなるのです。猫が黄色な唾を吐くやうになつては、どんな獸醫の治療にかけても回復しないと云ひますが、私方にて飼猫の育たぬのは一つの謎でありましたが、現在の家へ来てからは飼猫が無事です。

汽○車○の○遭○難○を○免○る○ 明治三十八年のことです。或日、大津市へ上り一番の汽車で行かうとして出る時に、前夜寝る折りに、確かに用箆筒の小抽斗ひきだしに容れて錠せちやうを下ろして置いた懐中くわいちゆうがどうしても見えませぬので、あれや是やと捜す爲に隙ひまが入り、遂に一番汽車の時間にはぐれました。

何も泥棒の這入つたではないし、私が他へ入れたのではないし實に不思議千萬でした。あまりに捜しあぐんで、復も一寸用筆筒の小抽斗を抜いて内を見ますと、全く妙です、チャンとそこにあるのでしたから、憎い奴だ、狸が邪魔をしくさつたと小言をつき乍ら停車場へゆき、上り二番に乗りましたが、時間が來てもなか／＼發車をしませぬ。譯を聴くと吃驚しました。上り一番が大谷驛の手前で轉覆して即死が十三人、怪我人も數十人から出來たので大混雑中であると知りましたから、狸が懷中を隠して私を汽車の遭難から救つてくれましたと氣附いたのです。

唯今此家に移轉してからは、狸の所爲と思はれることもなく、此飼猫の外に、猫らしいものは他から一疋も來ませぬから、狸は、元の屋敷附きの怪異であると思ひます。云々。此日に此女主人の若江女史が語つたことは、誇張も虚偽も竄入する隙のないもので、他にも種々と珍談があつた。

人間を嘲罵す 狐狸が化けると云ふことを、人間の幻覺説にする學者には叱られる

だらうが、靈怪妖異の中には實在事もあると云ふ見地に立つては、見逃しのならぬ話料として、化けない狸が、人語を以て人を罵言したと云ふ事を収録する。固より現代のことでは無く、約八十年近く前のことで、或老嫗の偽らざる告白に據る怪事であるから、讀者は其腹で讀まれたい。

著者の母の生家河野方へ出入りをする老婆はミサと云ふ獨身者で、六七丁を隔てた藩士三宅氏邸内の長屋に住んで居り、其長屋に古くから一疋の狸が居つて、ミサ婆と可なり仲好しであつたが、婆さんは三日にあげず河野方へ來て、雜魚の使ひ剩りや大きい魚のアラなどを、手桶や手籠にドツサリ盛り込んで貰つて歸るのが常であつたので(同家は平素魚鳥の到來品の多い家であつた)何故いつも其様に澤山持歸るかと訊ねると家の外道にも喰べさせますからと言つた。

此婆さんが時折り外道の腕白に就て告口をすると、婆さんが歸つて來た時に、狸は必ず婆さんを詰つて、其口の悪いのを責めたものだ。又狸は折り／＼婆さんに隨行

して河野方へ來ると見え、不意に狸の十八番の悪戯を演つて人々を困らした。其悪戯と云ふのは、使用中の臺所器具を隠匿するのがお定りであつた。タツタ今其所にあつた火吹竹とか火箸とか、或は鯉搔きとかが突然行衛が知れなくなり、家の内を捜し廻つて騒ぎして居る最中に、元の場所にヒョコリと出現すると云ふの類であつた。時としてはミサ婆さんの來ない時にも此物匿しが演出される、とやがて婆さんがやつて來たもので、狸が婆さんの前驅に來ることもあつた。

婆さんは或る日、來て、自分方の母屋で下の如きことがあつたとて笑話をして聽かせた。三宅氏の主人が風呂に入つて居ると、其母親が來て下を焚いてゐた。そこへ狸が出て來てのぞいたので主人が大聲で、また出て來たと叱つて赤裸で追ふ擬勢をして風呂の外へ飛出したら、狸は同家の臺所の横の物置きになつてゐる天井裏へ逃登りさま、人語を以て、人間てものは馬鹿な奴だ、親の前でも、振珍ふりちんでと嘲けつたので、三宅氏母子は苦笑した云々。昔の物語り本などに、馬や猫の人語を爲したこ

とが詳記して有るところを見るが、マンザラ虚事ばかりでも無ささうだ、人間に怩近の獸の老甲らうかふしや者は、人語を爲し得るものがあると思はねばならぬ。彼等の人語は、實地の人語であるか、又は暗示を使用した幻音か、そこは何とも言へぬことであるも兎に角、動物の精神の働きになることであるのは争はれぬ。

序に馬が人語を爲した事實を書かう。天保九年四月八日、東海道藤澤宿の馬が荷物をつけて大磯へ向ふ途中、ヶハイ坂まで行くと、大磯から權吉なる馬士まごが荷馬を連れて來て荷の交換を申込み、藤澤の馬士も承知して双方が荷を着換ついかへたところ、權吉の運んで來た荷物が馬鹿に重いので、藤澤の馬士が是は重過ぎて吾等の馬には堪えないから交換を中止すると言つた。此時、權吉が何か答へようとする前に、權吉の馬が突如人語を以て『毎日々々重荷を脊負しよはせる末の冥利が悪かんべい』と分明に言つた。此言葉は兩方の馬士の外にも確かに聞取つた人もあつて大に驚かれ、そこら

中の評判となつた。権吉と云ふ馬士はかねて慳貪で評判の悪い人間で、平常の着荷を得るのに、なるべく容積が小さくて重量の多いのを撰み取り、二駄分の賃を食つて一駄につけるから、其馬の苦しむことは夥しくあつたのだ。彼は馬の人語を聞いてから即日他所へ逐電してしまつた。

名古屋の三好想山が、江戸から歸國の時大磯を通つたのが十日の夕方、そこで馬の人語のことを耳にしたので、小田原から備つて來た馬士の千之丞と云ふをして、虚實如何を調べさせに、わざわざ大磯宿の権吉方へ行かせて見ると、馬屋には注連が張られ一人の法印が來て祈つて居るところであつたと報告をした。

又想山は此地で、平塚村の北半里のマサ村の材木商治右衛門なるものゝ飼馬の人語を爲した事蹟をも聞いた。治右衛門の忤の錠五郎は、氣の荒い人間で、無體に飼馬を虐待するのであつたが、或る夜其老母が手水に立つて厩の前を通ると、鹿毛の馬が、毎日の荷の重いのは太儀にも無いが、此家の息子に毎日腹を蹴られるのが辛い

と言つたので、母親は驚き恐れ、爾來此馬は樂な方面に差向けることにした。錠五郎は平素彼の馬に一駄半又は二駄の荷をつけ、僅かの事にでも直きに馬の腹を蹴る癖があつたとのことを、錠五郎と友達の馬士の谷五郎と云ふのから直接に聞いたと記してある。

動物が人語を爲すのは、幽鬼が憑いて爲すのであると言ふ説もあるが、さうとばかりも定められぬ。柳田國男氏の話に、氏の母堂が若い時に、其頃信州飯田の某方の飼猫が「干鯛くれ」と言つたと云ふ話を聽かされた。

人語の意味を解しない九官鳥が巧みに種々の人語を模倣することを想はゞ、人情や人語を解する老獺な野獸が人語を爲すのは、強いて怪異視する價値は無いかも知れない。

明治十二三年頃、家翁が出雲國能義郡比田村に行つた時、農家に飼つてある深山鴨が、分明に『嗅、餌が無い』と鳴いたのを聽いた、其時に彼の籠の中には餌が無くな

つてゐた。尤も此鳥は餌の缺乏をして居る時に、時々此啼き方をするのであつたと云ふから、此語の意味を知つて居たかも知れない。

箱を踊らせる 我曾祖父時代に、近所に老狸が棲んで居て能くいたづらをした。其頃、幅三間ばかりの堀を隔てた裏向ひの親戚の鈴村家に、二十歳ばかりの病身娘があつて、時々、堀の一本橋を渡つて著者方へ遊びに来たのであるが、或日の晩方に其娘が橋を渡つて来て、竹藪の際にある柿の木に靠れて物思はしげに立つてゐた姿を、友達であつた著者の大叔母が見た。翌日に聽けば其日は病氣が重く一步も室外に出たものでは無いことが知れて、奴が化けたのだと知られた。

又或夜我家の老刀自が一人で留守居をして、行燈の前で、木綿車にかゝつて糸を紡いで居ると、側にあつた箆箱が、忽然獨りで轉覆して中の物を全部抛り出し、空箱になつてから二尺ばかり空中へ浮揚して踊出した。老刀自は剛膽な婦人であつたので、一瞥を與へたのみで靜かに木綿唄を唄ひ出し、箱の踊りに調子を合せて車を廻

して居ると、やがて箱の下から淡黒い四ツ足の體軀が現れて、長い尾を疊に引ずり乍ら後肢で立つて踊るのが見える。全く狸が箱を被つて踊るのであつた。最初は狸の胸體が見えないで箱ばかり見えて居たのも妙であつたが、察せられたところでは初め狸は老刀自を驚かす考へで、隱身の法を使つて箱ばかり踊らせたところ、刀自が驚かないのみか、却つて唄で合せるので、狸も興に入り終に其肉身を露出したらしい。

又他の或夜、老刀自が一人留守居をしてお針をしてゐる内に、突然行燈が消えたので、燧石箱を取りに臺所へ往いたところ、闇中に額を柱に打當てたら、傍で、クス／＼と嘲笑するやうな聲が聞えたさうだ。

老狸の隱形の術と云ふことを現代人に云ふには、氣づらい思ひがあるから、傍證事として現代にも怪獸のあることを紹介しよう。埼玉縣浦和町の實業家佐藤氏の談に氏が或日知人某を訪問して坐敷で談話中、五圓紙幣の二つ折りにしたのが、次の室

から出て来て、疊の上三四寸程の空中を獨りで走つて主人の膝の上に来ると、主人は其を手を受けて脊向きになつて何かする態さまであつた。佐藤氏は奇怪に思ひ、貴君の評判の不良なことはかねて耳にしたが、今の紙幣は一體どうしたものかと詰問したら、主人は苦笑をして、見られた上は自白する。吾が使ふ尾崎狐が咬くはへて来てくれたのだと告げた。動物たるものが、白晝に人前に徘徊して其肉體を人眼に見せなると云ふことは、常人の到底信じ難い事態ではあるが、生理學や物理學では否認すべき事であつても、事實であるから眞の權威である。人間の五官は人間だけの機能にしかならぬもので、其視力聴力嗅力などは概して鳥獸よりも遙かに劣つて居る。犬や馬は人の視覺に入らぬ靈怪の形象を見て騒ぐことが西洋の心靈研究家によつて實驗されて居る。人の何物も見得ない空中を撮影して幽靈が寫眞にうつるのは、人眼の力の貧弱が立證される。尾崎狐(別稱クダ狐)に限らず、山陰道の西部に住ひとむ人狐なる一種小型の邪獸も、人の視覺を封鎖して自己を隱形に附する術がある(後段に書く)

古への忍術修行者の話の書いたものを讀んだことがあつたが、其に依ると、今日の催眠術とは別種の法術で、人體を無色透明の瓦斯體如きものに見せることが可能である。尤も其位置を知る人が凝視をする時は、微かすかに影の如くに淡々たんたん鬚髯ひげの觀くわんがあるも、無心の人の眼には何物も見えない程だとある(所謂新る超物理の現象は、拙著『靈怪談』に詳述してある)

日田の風流狸 豊後國日田町には明治初年に有名な老狸があつて、能く同地の老大家の五岳先生なる人に化けて他ひとを訪問するのが十八番藝であるが、此狸が化けるのは此事ばかりで其他のものには一度も化けたことが無い、而して又彼は風流韻事の席へのみ化ばけ五岳となつて現はれるのだから、土地の人は之に風流狸の綽名を與へて居た。詩人墨客が一堂に集會して雜談の際に、誰か「モウ先生が來きさうなものだが、とでも言ふと、やがて狸の五岳先生が悠々として歩み來るのが例であつた。

然るにこの狸の五岳先生は、人語を爲すことは出來ないので、何時も無言で縁側に



坐はるのだが、人語は爲さないでも、人語は能く解し得るのだから、怯ず臆せず人中に伍して得意の色があつた。最も滑稽であつたは、曾て明月の夜、眞の五岳先生の來て居る座敷の末端へ狸の先生が出て來たことがあつた。其時他郷からの來客が狸の先生を生捕りにしようとして犇ひしめいたのであつたが、土地の人々が其を制し、捕へても何の益もなし、害を爲さぬ名物狸だから放任して置くがよいと言つた。此折りの騒ぎに驚いて狸の先生は惶惶として庭へ逃下りたのは可笑しかつたと云ふ。他郷の人は後刻又現はれたら、書しよを書かせて困らしてやれなどと言つたが、其も土地の人々から制止された。

或時伊豫いよはるの今治から木原直三郎と云ふ人が、日田の門閥家の千原氏を訪問して數十日間滞在し同家所藏の珍書古器物類を賞觀して居たところ、或日白晝兩人會談の座敷へ、庭の方から、白髯を垂れた五岳先生が現はれて來て縁側に近づいた。其時主人の千原氏が恭敬な態度で、先生お越しですかと低頭をして迎へたが、何故か先生

は上らずに無言にて立去つた。木原氏は後で今のは狸の先生だと告げられて非常に驚いたと云ふ。此事は木原氏の家族の實話だから信じてよろしい。

**巧妙に逃げる** 一昨年の秋、攝津國豊能郡の奥の丹波境の枳根莊村きねしやうの小学校で聽いたのは、同校の分教場が約一里の 大字天王にあつて夜分には狸がよく出る。教員が宿直室にて就褥すると、廊下の方からスットコトンときまり切つた足拍子可笑しくやつて來て宿直室の隣りの教場を同じ足音で廻り歩くから、宿直員が姿を見てやうと思ひ、突嗟とつさに起き上つて戸を開けて見るとモウ何も居ない。次の度たびには、寢たさまをして静かにして起きて坐つてゐると其を知つてかやつて來ぬから、斷念して寢床に入るとやがてスットコトンでやつて來る。そこで非常に密やかに起き上らうとして、先づ頭を枕から離すと、それでモウ逃げ果せるから、誰人もまだスットコトンの本尊の姿を見届けた者は居ないと云ふ。どうして奴やつが斯くも人の隱微を知るかと怪むは野暮だ。狐狸は其様な能力を先天的に具有したのがある。此能力は心靈

肯定家の認める透視能力なるもので、遺憾にも今の科學では説明の出來ぬ怪事であるが精神科學では此理法は極めて明白である。狐憑きが一室に居て門外の事などを眼に見て居るもの、やうに透知するもの、精神物理の習熟者が未來の出來事を透視的に豫言するもの、悉く此理である。狐狸だから出来る、人間だから出来ないといふのでは無い。又人間に出来ても狐狸には出来る譯が無いと云ふ理も無い。見方によつては狐狸も人間も皆脊椎動物で、內的價値は五十歩百歩のものだ。

繪師を驚かす 是はかなり世に知られた化狸事件である。四條派の名畫手たる京都の幸野椽嶺が、明治九年の秋、近江國八幡町の豪商岡田小三郎方へ招聘されて行き毎日揮毫をして越年をしたのであつたが、畫伯が此家へ來て三日目に珍事が起つた。

其は當夜、山海の珍味で藝妓まで招いて歡待されて後、畫伯は其居室と定められた離座敷へ就寝すべく送られた。其離座敷は二個の土藏の間に數奇を凝した新座敷で

晝間は毎日此所で繪を描き夜は母屋へ出て遊ぶのであつた。

畫伯は離座敷で一睡して渴<sup>かほき</sup>を覺へて目が覺<sup>さ</sup>め枕元にある水差の水を飲んだが、便意を催したので起上らうとして夜具を刎ね除けると、面前の襖の際の有明行燈の横に何者か坐つて居るのが眼に附いた。稍驚いて老眼を擦つて熟視をすると、こは如何なこと、頭は四斗樽ほどあつて、井鉢大の二個の眼がクル／＼と光り、やがてバクリと口を開けたが、熟した大西瓜を眞二ツに割つたやうで、頭には寶冠を戴いて居る閻魔大王が畫伯を睨まへて居る。

之を見た畫伯は酔も一時に消え、恐ろしさの餘り人を呼ばうにも聲が出ず、直ぐに布團を被つたが飛蒐つて來たら如何はせんと生きた心地もしなかつた。けれど怖いもの見たさで、暫くして密に頭を出して見ると、閻魔大王は悠々閑々、自若として少しも動かないで元の通りに坐つて居るので、却つて一層恐ろしさが増して來た。然るに其所が畫伯たる所以で、恐<sup>こわ</sup>い乍らも若し是が眞の閻魔大王ならば畫料の爲に

能く見て置かうと思ひ、膽を太くして熟々と眺めて見ると、一層驚きが加はつた、今迄は頭ばかりに氣を取られて軀の方へは眼が届かなかつたが、上から段々と見下して行くと、威嚴の備はつた大頭の割合に軀は不似合に細かい。丁度七八歳の小兒の體格で、加之判然とは解らないが、素肌に鼠色の襦袍を着て、どう見てもポンチの閻魔様だつたから思はずクス／＼と笑つた。

笑はれてから大王はノコ／＼動き出したので、今度は愈々飛蒐られるのかと思ひ、又も布團の下深くもぐり込んで縮み上り、布團の端を押へて冷汗に濡れ、長い思をして夜の明けるのを待つと漸く母屋が起きて雨戸を繰り明ける音が聞へたので、ソツと布團の端を上げて窺ひ見ると既に閻魔大王は退散して居たから、飛出して廊下傳ひに母屋へ驅込んだ。丁度其時主人が起き出た所であつたが、書伯は物を言はうにも聲が出ないので握り拳で胸を叩いた。其顔色は死人の如く呼吸もつまつて居るやうなので、主人が心配して先生お加減でも悪いですかと言ふと、書伯は手を振つ

て漸くのことに夜前の怪異を告げた。主人は聞いて横手を打ち「八助、又悪戯を仕居つたな、だが奴も仲々だ、お客様を待遇することを知りくさる、書かきの先生だから相應した狂言を演つたのだ」と感心して、先生マア此方へお出でとて離坐敷へ行き大聲で「八助々々」と呼ぶと、一疋の狸がノソリと庭先へ出て來た。

主人は其に向つて人間に言うが如く大層叱りつけてから、先生もう大丈夫ですと言つた。椋嶺書伯は漸く腑に落ちたけれど、まだ半ば恐怖に襲はれて居るので、當分は手槍を枕元に備へて寝たが、無論再び怪異は出現しなかつた。其後書伯は歸京し右の實見を繪巻物に書き残して記念にした。狸は書伯に冷汗出さす程の目に會はして、永久に閻魔大王の姿を記憶に印せしめる藝術上の好意であつたらうと云ふ人もあつた。

**漁夫を護る貉** 上總國長者町の北方を流る、夷隅川の流域に江場土なる部落があつて其處に甚五兵衛に清太郎と云ふ二人の漁夫が、枝川を挟んで隣り合つて住んで居

たが、甚五兵衛の家の横の森には古い祠やしろがあつて古貉が一疋棲んで居た。此邊は明治初年頃迄は狐狸類の巢窟で能く村民がばかされた。いつか大程の巨體の古貉が引續き二疋まで捕獲されたこともある。右の古祠に棲む貉むじなはふとした事から甚五兵衛と因縁を結び、甚五兵衛が鱒を漁つて來るといつも何尾か分けてやると、貉は、今日は河口へ行けとか、カチ河が宜いとか言つて漁場を毎日教へてやつて漁獲を多からしめてゐた。

清太郎は此秘密を知らぬから不思議がり、後には甚五兵衛の跡をつけて行き、自分も同じ場所で漁撈をするけれど、甚五兵衛の漁獲には遙かに及ばぬので躍起になつてゐた。然るに或日清太郎が彼祠やしろの裏の林を通りかゝつた時、大きな貉が午睡をし乍ら、人語を以て寢言ねごに、甚五兵衛カチ河が宜いと言つたのを聴くや、ア、解わかつたと叫び、嫉ましさの腹立ちに貉を棒で撲り殺してしまつた。爾來甚五兵衛は多漁の途を失ひ清太郎も亦影響を受け出した。

山瀬の音眞似 狸族は物音の眞似が好きで、昔から狸は水涯で豆を研ぐ音をさすと云ふことは能く各國で言ひ傳へられてゐる。著者の郷里に小豆研橋と云ふ小さい石橋がある。明治前には、夜間其橋の下で小豆を研ぐやうな音が能く起つたもので、狸の業だと想はれてゐたものだ。狸が腹鼓を打つのも、狸は物の音を好むからのことであらう。津村正恭の隨筆にも、狸の糸くりとて樹木の空洞中に音すれど、聞く人十町二十町行きても其音耳を離れず同じことに聞ゆ云々とある。

石見國大田町に著者の縁家がある。其主人が或日、同地の古城山續きの上野山の横を通ると、霧雨の降る折りであつたが、忽ち騒然たる山瀬やませの音が附近に起つた。此邊には水の流れの無い處であるから、怪しく思ひ乍ら三四十間ばかりも山道を歩んだが、依然として山瀬の音は身邊に附いて廻まはるやうだ。ふと目についたのは、五七間先の道の分岐點の松の下の笹の葉蔭に、一疋の狸が居つて此方を見て居るのだから、時ならぬ山瀬の音は奴やつの所爲だと知るや否や、追ひ逃がしたら、夫つ切り寂と

して静かになつたことがあると咄した。

此咄の山瀬の音は狸のわざは業でも音の立つべき原料を見當らぬから、幻覺を起させたと見ねばならぬ。狸が水のある橋の下で豆研ぎの音をさすのは、幻聽ではなく實在の音響らしい。著者の考では、多分水際に集めた小石を掻き廻す音であらうと思ふ。

### 古人の記述

今から約百年あまり昔のこと、肥前國平戸在なる下方の庄屋の許に、或る日、平戸藩より派遣居住の郡代の牧山權右衛門と云ふが妻子同伴で来て坐敷で蕎麥の馳走に逢うて居た。是は庄屋から、かねて自分の家へお越しなさい蕎麥を差上げると云ふことだつたから、其に應じて此日にやつて來たのであつた。

ところが、此折りに庄屋の下男が草刈に行つて歸りがけに、生垣の外から家の内を窺つて見たら、坐敷に大小數疋の狸が居並んで何か喰ふさまであるので、驚いて草を下ろして家へ駆込み、庄屋方に居る下役したやくの書記に告げると、書記がそんな事があるものか、坐敷のお客は郡代様だと言ふたが、下男は兎に角外から一度覗いて見よとて連れ出して一緒に生垣の外から窺はせると、狸ではなく普通の人であるから、下役が大に下男を叱つてそこつ兪忽なことを言ふものでは無いと戒めて家へ入つた。

然れども下男は腑に落ちない、先きに苧草を脊負つたまゝに窺つた時に狸と見えたのだからモウ一度草を負うて窺つて見ようとて、草を脊負つて窺つて見ると又狸に見える。そこで又駆け込んで下役に告げた。下役は怪み乍ら再び出で、草を脊負つて窺ひ見ると、如何にも今度は狸が蕎麥を喰つて居るに相違はなく、草を下ろして窺ふと又人間に見える。實に不思議千萬だから、内密に庄屋を呼んで之を告げる。庄屋も出て見ると全く事實だから、真相看破の方法を案出した。

庄屋は坐敷へ行つて權右衛門の子供に向ひ、お子供がたのお慰みに、自分方の犬の兒に藝をさせて御覽に入れようと言つたら、權右衛門の一行が、聲を揃へて吾々は犬が嫌いだから犬の藝などは無用だと言つて非常に辭退をする様が變である。庄屋はさう仰有らずに兎に角御覽なさいと言ふと、權右衛門等は顔色を變へて周章たから、此奴愈々怪しいと思ひ近所の獵師どもに連れて來さした數疋の犬を坐敷へ追上げた。

スルと今迄人間であつたお客が悉く狸の正躰を露はして逃げのび、其中二三疋は犬に喰殺された。彼の蒞草を脊負ひ乍ら、窺ひ見た時に狸と見えた不思議さの原因が遂にわかつた。其は蒞草の中に、田畠の蟲除けの爲にされた村祈禱の百萬遍念佛の札が偶然に混つて居たので、此爲と知られた。(甲子夜話、卷末見解欄参照)

文政十一年のことである、小説家の馬琴の知人の雲峰と云ふ江戸の文人の家に、年久しく奉公をしてゐたヤチと云ふ七十餘の老婆があつた。此婆さんは三月下旬の頃

から、何と云ふ病氣もないのにフラ／＼としてゐたが、或日突然氣絶して死人同様となり、半日ばかりして少し正氣づいて靜臥してゐた。然るにそれから日々に大食するやうになり、常に十倍の量を食ひ、殊に餅菓子類の間食まで要求するに至つたが、雲峰方では言ふがまゝに與へてゐながら死病が近いのに合點のゆかぬことであると思つてゐた。

此ヤチ婆は手足が不自由なのに、夜になると元氣になつて手を拍つて面白げに歌ひ又は友達が來たとて高聲で獨語をする。或夜にはヒドク酒に酔うた如くになり翌朝日が高くなる迄熟睡することもあるなど甚だ奇怪であるから、雲峰は松本某なる醫師を招いて診察させると、此人には脈搏が無いとて呆れ、病名がつかぬので薬も與へられぬが、全く老衰病であるから、滋養食を與へるの外は無いと言ひ、時々來診して月日を送る内に、老婆は半身が大に瘦せて來て骨が出て窻が開き、其中から毛の生えたやうな物が見えるとして看病人が驚いて騒いだ。

かくて其年が暮れて翌年になつてもまだ息があるので、腰湯を使はせ、敷物なども毎日のやうに敷替へていたはり、爾今少女の看病人をつき切りにさせると申渡したら、老婆は喜んで何度となく禮を言つた。斯くて其年の冬が來たので、或日、着衣を着換へさせたところ、脱いだ着物に狸の毛らしい獸毛が多く附着し、其に臭氣が非常に高いので人々に怪まれた。其後、看護の少女が自分の枕元を狸の婆が徘徊したとか、婆の布圍の下から尻尾が出てゐたとか言つて怖れて寄りつかないやうになつた。

仍で雲峰は、ヤチ婆は狸に憑かれたものと知り、懇々と少女に諭したら、少女は能く呑み込んで復た看護をするやうになつたが、追々には慣れて怖がらぬやうになつた。又婆は依然として毎晩高聲に唄うて居たが、後には種々な器物の鳴音が、婆の寢室に起るやうに聞え、又は大に踊る足音も聞えた。又或朝、婆の枕元に多くの柿實が積んであるので、少女が之はどうしたものかと訊くと、昨夜のお客がおまへの

ねんごろな看護を感じて呉れたのだと答へたが、少女は怪んで之を喰べなかつた、而して試みに其柿を割つて見ても眞實の柿實であつた。又或る夜は切餅が澤山に少女の枕邊にあつたこともあり、又或る夜は一個の火の玉が手毬の如くころげて婆の枕邊を飛廻つたこともあつたので、翌朝之を問うと、昨夜は女客があつて毬を撞いたと言つた。又或る夜火の玉が室内を高く低く舞ひ歩いたので翌日之を訊ねると、羽子を搗いたのだと答へた。

又或る日婆が和歌が咏みたいとて筆紙を需めたから與へると無筆無文な身で「朝顔の朝は色よく咲めれど、夕は盡るものところ知れ」と書き、又或る日、蝙蝠に旭を畫いて賛に「日にも身をひそめつゝしむかはほりのよてつゝがなくとひかよふなり」と書いた。此奇怪な死骨の露はれた老衰者も、物食ふ分量は少しも減らず、一食毎に飯を八九碗食ひ、間食に吉野團子五六本、金鑊焼餅の類二三十を喰ふのであるが、其の老衰は少しも退歩しない不思議があつた。

或夜、少女の目に、婆の臥床に赫奕たる光明があつて三尊の彌陀佛が現はれ、婆の手を引いて行くやうに見へたので、少女は驚いて走り出て主人夫婦に告げた。夫婦は急いで行つて見たのに、何の異情も無かつた。其年の十一月二日の早朝、雲峰の妻が言ふには、夜前に夢うつゝとなく古狸が婆の寢室から出て家屋内を廻り歩いてから、戸の穴から出て行つたと見たと告げ、夫婦で婆の室に行つて見ると、少女はまだ臥てゐたが、婆は息が絶へて死んで居た。雲峰等は後日斯う言つてゐた、實は最初婆は頓死をしたのであつたが、老狸が其骸に憑いて今日に至つたのであると。

(鬼園小説集、摘要)

文化十一年三月、江戸新吉原の佐野松屋の抱女郎某の許へ、一二度通うた客があつたが、或夜此客が熟睡して居たところ、屏風の外で新造や禿が何か戯れごとをしたと見えて、俄かに大聲を擧げて狂つた。其聲に驚いて目を覺ました客が、非常に周章てた状態で屏風の裡から飛び出したのを見ると、大きい古狸であつたから、皆々

騒ぎ立て、若者どもが大勢駈け來り、此處彼處へ追ひつめ廻したところ、狸は終に格子窓を衝き破つて逸失せたが、此狸の使つた錢は正眞の錢であつた。(豊井子日記)

近江國彦根の古利明性寺に、非常に古い狸が居つて、文化年間に、寺傳では二百歳に及ぶ狸だと言はれた。其當時の住職の宗嚴は有名な詩人だったので、遠近から文人詞客が訪來して滞在するものが絶えない。然るに宿る客は、第一夜に必ず狸に寢込みを襲はれて高聲に壓され、次の夜には壓されない代りに、寢室を荒らされて大に手を古摺ることが常例になつて居た。其明性寺へ、文化十二年の夏に、江戸から蒲生亮と云ふ儒生が、遊覧かたがた出かけて來たことがあつた。此人は宗嚴と親戚柄であるから、宗嚴は例の狸のことを心配して、亮の寢床を自分の寢室と一緒に取るやうにさせた。

然るに亮は其を耻に思つた。自分は武士の家に生れた人間であるのに、狸に恐れて僧と同室に臥るのは外聞に係る、自分は其狸を捕へて狸汁にして坊主どもを驚かし



てやるも一興だと剛い考を起し、宗殿に對ひ、自分は閑靜な別室で寝るのが好きだから、客室で一人臥かしてもらひたいと言立て、遂に別室に寢床を設けさせ、屏風を立廻はして、其入口に寺僕から借りた鐵の彈機はぢきを仕掛け、布團を頭から被つて狸寢をして待つて居たところ、異例にも其夜は狸は來ないで無事に明けた。

次の夜も又待つてゐたに、何の事もなく、遂に十一日間毎夜待つたが、狸はヒツソリとして何等爲すところは無かつた。狸は亮の氣勢を察して之を避けたのである。

(甲子夜話)

文化年間、江戸の大關力士の緋威ひゑどしが、或時平戸侯松浦靜山の抱力士の錦に紹介されて靜山を訪問し、四方山嘯の中に、緋威の郷里なる安藝國の有名な化狸の事實を語つたところ、餘りに奇怪なので、靜山が信じなかつたら、錦が、其狸のことは自分も知つて居る、全く事實であると保證をしたので、靜山は初めて其狸の話を書き留めた。其狸の話と云ふは左の如くである。

狸は平生、人間に化けて居て、人の如く談話をし、何等普通人に異つて居らぬ、緋威も郷里にある時分には數度之と語を交へた。此狸は碁が上手で、對手の人間が窮して苦考をすると、凡夫悲しや目は見えす杯と言つて之を嘲弄するのである。人が此狸を困くしめようとして、突然戸を閉てたり障子を閉てたりすると、僅かの隙間から風の如くに脱け出す。又或時汝に弟子があるかと問うたら、弟子はあるにはあるが、此近邊には居ない、唯だ隣村の跪ちんはぎつね狐きつねが自分の弟子であるけれど、まだ人語を爲すことが出来ぬと答へたさうだ。(同上)

鎌倉の建長寺境内に數百年栖居した古狸があつたが、今を去る百二十年前の天明四年に顯著な化け話をしでかした。

建長寺で其頃、山門を再建することに決し、諸國の末寺其他遠近の有志家から寄附金を募ることになつたが、其企劃が寺の幹部だけの心得で、まだ一般の寺僧に發表されて居ない時に、建長寺の長老と稱する一人の僧侶が、同寺の繪符と、關東諸國

の宿々村々に積立ての人馬帳の寫しを携帯して、近國を勸財して歩いたのだ。此僧が或る日、武藏國板橋宿へ現はれ、戸々を勸進して晩方に、庄屋の家を訪問し自分は建長寺の山門勸進の僧であるが、從僕が途中で草臥れ込んだので、小僧をつけて其家に送り行かせたから、斯うして一人になつたが、今日は大雪が降つて、殊の外に寒く、次の村へは行けさうにもないから、御厄介乍ら何とぞ一泊させて下さらぬかと頼んだ。

庄屋は、丁度隣家が宿屋であるからとて、其へ案内をすることにしたら、僧は大に喜び、墨繪の渡河の布袋の一幅を出して與へ、自分の揮毫だと言つて謝禮を述べ、夫から宿屋へ着いたが、宿屋で膳に坐つたときに、汁椀を持ちあぐみ、又風呂に案内された時に大層困つた態で何とか言譯をして入浴をしなかつた。夫に最も奇怪なことは、其僧の影が、障子へは狸の姿に映つたので、宿屋の人々は耳語して怪んで居た。僧は翌日宿屋の勘定を済まして練馬村へ行き、其地の宿屋に投宿し、夜に入

て風呂へ案内されて入浴中に、下女が用事の爲に一寸湯殿の口へ行つた時に、僧に尾があつて其尾だけを湯桶につけてヂャブ／＼と入浴の音をさせて居たのをチラと見たので、大に驚いて主婦に密告をした處、主婦は堅く口外を禁じて他に漏れるのを防いだ。

僧は次の日に宿屋を出發して、青梅街道を、宿次にて、駕籠で行くことになつたが昇夫が化僧の噂を漏れ聞いたので、實否を測る爲に、或る地點に於て竊に犬を駕籠の近くへ呼寄せたところ、犬は駕籠に躍り着き、戸を咬破て、佛衣の裙を咬え、僧を引出して之を咬殺した。然るに僧の體相は變らなかつたので、昇夫は大に後悔し村役人へ自首して出でたから、事件が郡奉行所へ持出されて困難になつたが、三日を経た時に、彼の僧の屍體が狸に化したから大評判となり、村民が寄つて、狸の荷物を調べて見ると、勸財の金が三十兩と一厘錢が五貫二百文あつたので、事由を具して彼の繪符と共に建長寺へ送り届けた。

建長寺では、さては寺の古狸が化けて勸進に歩いたものだ、折角繪符や人馬帳が紛失したけれど、餘人の盗んだのではあるまいとて、暫く放棄して置いた所であつたと使者に答へた。尙ほ同寺では、近來、筆墨紙の類や書帖などが屢々亡失するので人々が不審をして居たが、今にして思へば、彼の狸が習書の料にしたのであつたと言ひ合つた。

右の狸の書いた布袋の繪は、江戸の本所表町の三夕と云ふ町醫の手に入り、諸家へ借覽させる内に高評となり、遂に將軍家治の一覽に逢うた時將軍がそれとなく書師の狩野某に鑑定をさせたところ、某が、此書は筆法に浮いた所がある、多分口筆を用ゐしものにて、手にて描きしものとは見へない云々と鑑定をしたので、家治はさすがの鑑定だとして賞詞を與へたと云ふ。(同上)

享保の頃、加州金澤淺野町に山屋藤兵衛とて駕昇渡世がこきとせいの者、江戸へ出で武州深谷の九兵衛と云ふものと棒組して、武州總泉寺の病める老僧の京に赴くを昇て北陸道を

經て上りける。此僧風姿異相にして八九十歳のさまなり、頭に物を冠ぶり墨衣を著し紫の頭陀をかけ、道中の宿々にても病に障るとて寢食共に駕の内にて調へける。言語少く甚だ異躰なれども、金子を多く所持して水の如く遣ひける故、二人の駕昇も忠實に看病して登りける。

此僧山路を行くは病に障るとて越中より海邊を傳ひ能州へ廻りて濱通りに黒津舟に至る、道すがら能く物書いて人に與へけるが、此地の神職齋藤丹後守にも一書與へける。夫より越前の橋立に至り、人家の腰に駕を下し、二人の昇夫も煙草を喫て休らひ居しに、夫ども多く吠出で喧し、かねて病僧の忌物なれば二人の昇夫杖を以て頻りに追拂ひけるに、此中名犬やありけん、白毛なる狗一疋、一文字に飛來て駕に飛付き、老僧の咽喉を咬へて引出しければ、一聲あつと叫んで死しける。此時享保二十一年六月下旬なり。昇夫も里人も大に驚き、先づ病僧を介抱しけるが古き貉の屍に變じける。何れも興をさまし、先づ二人の昇夫を捕へ、汝等も正躰を現はすべ

しと大勢圍んで叫びけるに、二人の者ども様々に詞をつくし事情を明かし漸くに命を助かり、名主に届けて死骸を埋め、一人の證人を乞ひうけ日を経て武州へ歸りける。

さて二人の者は總泉寺に行きて始終を斷り妖僧の使ひ残しの金をも返しける。和尚對面して、さもあらん彼の病僧當寺に住みて二百年ばかり、其素性を知るもの無し檀家の信施を貯ふること年久し、依て金子數多彼が一室にあり、然るに十日計り以前、此僧忽然と來りて申しけるは、我れ今北國にて狗の爲に命を損じぬ、願くは般若を修して後を弔ひ給はるべしとて失せぬ、さては實事なりしかとて法會を營み、遺金を配當し、九兵衛、藤兵衛共に金五十兩づゝ分け與ふ何れも俄に徳つきて悦び歸國せり。この事普く諸人の知るところ、彼の妖僧の書を見るに文字正しからず讀み得難く、手跡人間と遙かに異れり只朱印の文字一は蒼龍軒、一は靈翁とあり、軒號も、しの竹草むらの軒と云へれば、古貉の自稱たること宜なり、たゞ齋藤氏所持

の一軸のみ文字正しく松無古今色竹有遠近節と能く讀まれけるも一興也、九兵衛は江戸へ出で本郷にて布商となりしが、加州の藤兵衛が狂氣となりて飢死せしを聞き驚きて持佛堂に妖僧の戒名北海靈翁と云ふ碑を立て弔ひけるとぞ。(三州奇談)

文政の初年頃尾張の熱田在の井戸田村生れのフミと云ふ淫奔女が、宮宿の宿屋扇屋へ飯盛女に住みこみ、莫連を發揮して居る内に、髮結ひの弟子の男と双思の仲となり、或る日、夜を期して縊首の約束をした。男は日が暮れて酒を飲んで、あれこれの知人の家を暇乞ひの心で經廻ぐり、夜更けて約束の場所の秋葉の森へ行て見ると女が來て居ないので扇屋へ行つて訊ねると、宵過ぎの頃から行衛が知れぬと答へられ其夜は自分の家へ歸つた。

フミは其夜、約束の如く秋葉の森へ來ると、彼の男が先から待つてゐて、二三丁先きのつゝじが森と云ふへ行き、夜明け頃まで語つてから、道傍の榎の六尺許り上の枝に腰帶を投かけ、その兩端を輪にして各それに首をはめ込み、釣瓶心中とて二人

一緒に首を縊る法を敢行した。然るに二人は同時に踏臺を蹴放したところ、どうしたものか男の體は至て軽く、木の股へ一氣に吊上り、女は體が重くて足先がうまく地を離れぬので、首が締りかね、死なうと努力したが死なれないで困つて居た。其内愈よ夜も明けかけて、早出の村民某が通りかゝつて見ると、フミの片割に縊死して居るのは狸であつて、上の方にある木の股へ首を挟まれて死んで居た。此事は現場を見た大喜村生れの彌助が、其奉公先きの主人の名古屋藩士三好想山に話したことと事實確かであるとの事だ。此邊には昔から古狸がゐて、いろ／＼と人を惱まして有名な所であつたが、彼の狸が死んでからは、頓に怪事が無くなつて、村民どもが喜んださうな。(想山著聞奇集、縮重)

## 外 道

### 解 説

外道ロダウなるものは動物にして、自己を愛養する家には福利を與へ、自己の好まざる人には病氣を與へ、或は物資の損害行爲を投ずるなど一種の妖魔的能力を有するもの、總稱で、東海道、又は關東に云ふクダ狐、尾サキ狐、(石見にては之を大神と云ひ出雲伯耆にては人狐と稱するは此小型の狐の一種である)。大阪地方の豆狸まめだぬき、中國九州方面の妖蛇群のトウベウ、中國地方にある蛭神ひるがみ、四國地方や山陽道の西部の犬神などであるが、是等を一々記述するに於ては、分量多大で浩瀚なる書を爲さねば已まぬから、本書に

ては著者の郷里たる山陰道西部の外道だけを記載するに止めたが、それでも一般の外道の習性は略ぼ判明することゝ信ずる。

山陰道の出雲石見には、小型の妖狐の宿ると稱せられた家が、他國の外道持ちの數より遙かに多く、社交上の妨害の度も濃密で、困る人が多いので、迷信打破家が、明治中葉頃から大に骨を折つて、地方人を啓發させようと努力をしたけれど、割合に成績の擧らぬのは、外道の事蹟が顯著なからであるが、その雲石人の言ふ外道なるものを、地方の動物學の教師輩は鼬いたちの一種だと言つて居る。如何にも外貌や體軀の大きさや毛色は鼬ソツクリである。然れども仔細に視ると鼬でなく、狐である。

此妖獸の特徴は、耳タブが二重になつて居り、四肢の爪が十本づゝあることで、口吻の尖り様が狐の口吻の如く、又眼も鼬よりも狐に似て居ることや、鼬が概して孤獨生活をするのに、此物は群棲生活を好み、同類間の友情が非常に厚いことや、鼬は犬や人に捕獲される時に臭屍を放つに、此は殆ど之を放つたと云ふことを聞かぬ

次に又鼬は人に慣れないのに、此物は甚だ人に恠れ易く、人語を解すること犬猫以上で、邪智に富んで居る點は野狐に異らぬ。

俗稱に、一家七十五疋と云ふも、其様に多くは居ない、大抵數疋乃至十疋位の程度であるが、其住む家の人にして偶まには無知覺であつたり、又住んで居ないでも外道持ちとして有名である家があり、其類の人は、自家の名譽上、非常に外道の迷信を呼號するのであるけれど、其家族の内に誰かが、他家の人に對して所謂外道の怪異を投與するものがある。此點から見ると、外道の本源は人に在つて獸でなく、唯だ獸は外道の邪力あるものゝ家に寄生するだけであるかとも想はれるが、一方には又現に獸に妖邪の力の顯著なものがあると云ふ事實もある。是に依て見ると、世の外道持ちなる家の外道には、人と獸との二種があることが判る。人にあるのは一種の遺傳性の精神能力者で、病的惡癖とも言へるが、此種の外道は甚だ稀である。獸の外道が居ても、他人の眼にかゝらぬ内は、其家が富裕になる一方だけれど、他

人の眼にかゝり出すのは、家の衰への始めだと云ふ。飼ひが悪くなるから出歩くのだとも言はれるが、さうばかりでも無ささうだ。主家が没落でもして居所が無くなると、方々に離散して漂泊者になるが、追々には餓死したり、他獸に食はれたりして死滅する。此物は野生生活の力の全く缺乏した動物たることは疑ひが無い。著者が郷里に在りし時、白晝よく他家から来て庭先へ現はれた。いつか醬油屋の小僧が、著者方の横の濠ほりの小橋の際で、棒を投げつけて獲つたこともあつたが、そいつは橋の下の穴から出て來たのだと云ふ。多分主家を失つた浪人ものであつたらう。家の無い漂泊ものは、最早人に憑く力も無くなつて居るただの憫れむべき小獸たるに過ぎないのだ。貧すりや鈍するのは人間ばかりでは無い。

外道を家から突放すには法がある。錢を藁包にして赤飯を添加して祝ひ言を言て、道ばた又は田畑などのほとりへ棄て、しまふのであるが、其を拾つた人間が、新しい主人になるのだ。

又此獸は、主家に忠義なことは著しく、主家の人の恨み又は憤りをかける人には、直ちに驅け行つて之に憑いて苦しめる力あるにも拘らず、自體に危害を加へる人には恐怖して畏縮する癖がある。之を以て見れば、此獸は佞媚にして全然小人的卑格の邪獸であることが判る。

又此獸は人に對して隱身の方術を爲す奇怪があるが、石見の東部では、箒木を枕にして見ると、外道の隱身の法が利かないと云ふ人もある。又此獸が徘徊して他人の目にかゝるやうになると、他所へ分封が始まるのだと云ふ説が、一般に信じられて居る。

又此獸は實に能く人語を解しまた人の性情に通じてゐる。曾て出雲國簸川郡中部ひのなにて有名な素封家にして外道持の家の庭で、伊勢神樂が行はれた時、窓の格子に六七疋の外道が居並んで、恰も人間のやるやうな表情ぶりで嬉々として神樂を見て居たと云ふことであつた。

石見國安濃郡川合村にも有名な外道持ちがあるが、近所の人で、其外道持から畑物又は餅菓子類を貰つた時には、先づ暫時は貰物を臺所の端に放置し、牡丹餅などは棚へ上げて蓋をデラして置く習慣がある。是は吝みのか、つた贈物である時に外道が来て其一部分を咬へて持歸るに便利ならしめる爲である。曾て或家は、外道持ちから生大根數本を貰つて、戸口に置いたところ、其暮がたに外道が来て、大根中の大なるものを一本、重げにして自家へ引摺り乍ら持歸るのが見られた。

又同郡大田町の常建寺下の農、屋號△△△も有名な外道持ちで、外道が年中自家の田畑を見廻るのが見られてゐた。曾て近所の某少女が竹箒木を以て外道を逐ひ廻す時、主人が出て来て制止をしたが、其時外道は邸前の石垣の隙へもぐり込み、顔だけ出して容子を見てゐたと云ふが、其少女は不思議に外道に憑れずに濟んだ。又其外道持の主人が、居宅を増築するに方り、大工の來るのが遅いとて、迎へに行つた折りには、外道が先に立つて行き、主人が大工を連れ歸る時には二人の間を愛犬の

如くに駆け廻り、主人に「ヤイ邪魔臭い」と叱られたことを見た人もあつた。

右に記した外道は、石見の犬神(出雲の人狐と同一物)に關したものであるが、次ぎには、聊かトウベウと蛭神とを記さう。

一 明治三十年頃、石見國大田町なる南八幡社の石崎社司が、境内の裏手にある石宮の臺石が腐蝕したので、氏子の田原嘉惣兵衛なる石工を傭うて、臺石の修繕をさせることにした。其日嘉惣兵衛は道具を携帯して八幡社へ行き、何氣なく右の石造の小祠の石の扉を開けたところ、五六寸ばかりの淡黒い、首玉入りの小蛇が數百疋塊團をして居たのが、扉の開くと共に一齊に嘉惣兵衛に飛つき膝から胸の方へ登り上る。

嘉惣兵衛は意外なものに襲撃せられ、呀と聲を擧げて夢中になつて両手で群蛇を掻落し、道具類を其儘にして山下の社司方へ逃げて行き、モウ二度と仕事に行かぬと



云つて色を亡くして恐れて居る。然るに石崎社司は笑つて平然たるもので、其は氣の毒であつた、自分がウツカリ失念して言つて置かなかつたから驚いたであらう、何も恐がるには及ばぬ自分が治めてやるから隨つて來いとて、俵蓋を一枚と小い御幣とを掲げて八幡社へ行き、彼石の宮の横へ藁蓋を置き、御幣を振て何か祝詞を奏げてから、御幣を藁蓋の中央に挿した。

スルと不思議、そこらちう散らばつて居た數百の群蛇が、彼の御幣を中心にして残らず藁蓋の上へ集合し、おとなしく一塊になつて静止をしたので、夫から嘉惣兵衛は安心をして仕事に取りかゝり、夕方に修繕を終つた。右の小蛇は外道の一種にて俗にトウベウと呼ばれ、之を飼養する家は錢に不自由せずと云はるゝものであつた。

斯くて石崎社司は又やつて來て、蛇群の芯柱となつてゐる彼の御幣を抜き取り、二三回左右に振て何か唱へ終ると、蛇は全部團塊から解けて、ゾロ／＼這出し乍ら、

元の石祠の中に納まつてから扉は閉されたのであつたが、蛇群の社司に對する状態は純然たる家畜の如くであつたから、石工は不思議に眺めてゐたと云ふ。此蛇群は既に約四十年前から石宮に封じ込められて居り、一定時に食物を與へらるゝも、誰も知るものは無かつたが、茲に至つて町民の知るところとなつたと云ふ。

二 前記の大田町より約一里餘の東南の山間部落なる野城の農某方へ、越中の賣藥行商人が宿泊をして居たところ、同家の寡婦が毎日の様に納戸へ食物を持って入るさまが不審に想はれ、或時家人の不在に納戸へ入つて見ると、押入に甕がある。蓋を取つて見ると、中に小蛇が充盈して居たので、さては是なりと覺り、甕に蓋を施してから、舞所の釜で、湯玉のたぎる熱湯を作り、桶に入れて持て來て、彼の甕の中へ注入して、蓋をして置いて素知ぬ顔であつた。

程經て婦が歸來し、納戸の蛇が全群白く煮え爛れて死亡しあるを發見したので、行商人の前へ坐り、蛇を殺したのは貴君ならんと詰ると、行商人は何も知らぬと白を

切つたら、貴君ならでは外に爲すべき人は無い、自分はあらたまつて御禮を言はねばならぬ。實は自己方は何代も此物の爲に苦勞を續けたものにて、今日は能くこそ殺して下さつた。我々は殺したくても殺し得ぬので困つて居たところだ。併し今日残らず殺したならば仕合せだが、若し遊びに出て居て残つた分があつて祟るとなると、自分か貴君か、祟られるかも知れぬけれど、兎に角我々の爲に善根して下されたと喜ぶので、行商人も包み果せず、自分の行爲なることを告げたと云ふ。妖蛇群を殺すなら遺類なく殺せとは、昔からの掟である。

總てトウベウは巢窟から出遊するにも、一時に多數出るやうなことが至つて稀にて他人の眼にかゝりかねるも、偶まには例外あり。著者の幼時、松江市内中原の△△氏方の座敷の庭の石燈籠の蔭に大群の蠢動するのを見かけた入の咄に、蛇は大凡七八寸ばかりの體には色は黒赤く、黄色の首環ある爲めに目立ちて嫌な感じを起したと云うた。

妖蛇の群 石見國安濃郡刺鹿村の素封家大△方は蛭ひるの外道持ちと云ふ評判の家で、主人は元日の雑煮餅を喫せぬ風習がある。雑煮の椀は調へても喫はぬのだ、此は椀には蛭が溢杯いっばいになつて憑いて居ると云ふ譯だと云ふ。此外道は播州邊の神社から受けて來るのだと謂はれて居るも、著者は寡聞の爲に元締を知らぬ。

## 事 例

外道の忍術 石見國大田町の東北部の農三河屋は、有名な大神持で、家の横の空地に數株の夏橙を有し、毎年の結實が甚だ多い。然るに道路境ざかひに垣を設けぬ爲め橙實は人に偷まれる筈だのに一類ひとつも偷まれぬ。若し誰にても偷むものあらば、直ちに憑かれて難儀をする。以前には二三名憑かれて死んだものもあつたと云ふ程にて、同家は今尙ほ社交上から敬遠主義を執られて居る。

或年の冬の夜、近所の青年輩が、該家の隣家某方に集り、納屋の土間にて草履を造つて居ると、小動物らしい物が各人の身邊をグウ／＼啼き乍ら五月蠅く徘徊するの  
で、膝を動かし肱を揮ひなどして追ひ拂はんとするけれど無効で、加之、誰にも姿  
が見えぬから略ぼ想像がつけられた。其内、一人の頑健な兵隊戻りが、エ、五月蠅  
と叫びさま勢ひ鋭く傍の叩囊の束を掌で叩つけると、上から墮ちたか地から湧いた  
か、藁束の上へ忽然二正の若い犬神が現はれてコソ／＼と隅の方へ逃げ失せた。蓋  
し其青年の猛勢の爲に、彼等外道の隱形術が破れたものである。

竹松の跋扈 同じ大田町の警察署南隣の岩谷半市と云ふ大工の家に竹松と自稱する  
有名な外道が居つたが、此竹松は半市の女房のお茂に深い因縁があるものと見做さ  
れてゐた。或日同地方第一の金満家の常村の下女の某が川で里芋を洗つて居るとこ  
ろへ、お茂が通り掛り、うまさうな里芋だことよと愛嬌を言つて行過ぎた。やがて  
右の下女が主家へ歸ると、主人の内儀は眼の色が變り、變なことを口走り始めて、

容子が怪しくなつたので皆が心配をして居ると、其中に『今日の里芋を分けてくれぬかい』と言つた。此言葉で多少氣がついたから、數人の下女を調べて見ると、先刻のお茂のことが知れたので、直ちに里芋を持たしてやつたところ、忽ち内儀は常態に復した。

竹松は曾て近所の麴屋の娘に憑いて三年間も煩はした時、兩家間に大悶着が起つた竹松方では、自分の家に奇怪な獸が居るなら、家捜しに来てつまみ出せ、いつでも搜がさしてやる、不名譽なことを言ひかけると告訴をすると敦圀いた。麴屋では、娘が竹松だとして饒舌るから貴様の方の外道の所爲だと争うた。竹松方の主人は元來養子であるので、我女房と竹松との心理的關繫を知らぬばかりで無く、我家に竹松なる邪獸の棲むのをも實際に知らずに居るらしいとの評判があつた。竹松が他に憑いて悩ます時、被害者側が御祈禱をやると必ずお茂に響いて頭痛を悩まさせる。そこでお茂が、着い面して鉢捲でもして居る日には、竹松が人に憑いてゐる日たるこ

とが知られた。

竹松が隣接の警察署の庭の杏の木を枯らした珍談がある。杏の木は幹圍二尺餘りの壯んな木で毎年多くの美しい實が結るのであつたが、或年の夏の日曜日に竹松方の頑童が柵の間を潜つて来て、竹竿で杏實をつゝき落すところを宿直の巡査に捉へられ、散々に威嚇されたことがあつた。夫から間もなく俄然杏の木が衰色を現はし秋に至つて枯死した。警察では之を掘取ることにして小使が根かたを掘ると、幹の真下に土龍の穴のやうな隧道があつて、竹松方の方向へ二間ばかり走つて居り、而して根が何本も嚙切つてあるのを見附けた。竹松の平素の慣例から言へば、息子を虐めた巡査に取憑かねばならぬのに、巡査は畏くて杏を枯らしたのだ。

年久しく地方人を惱ました竹松も、天命つきて非命の最期を遂げる時期が來た。或日近所に一部落を爲して居るものゝ親分顔の政十なる老人が、切石の大井戸へ水汲みに行く途中、畑の畝を竹松が走つて居たので、水桶の尻で押へて捕つた時には、

竹松が捕られたとて全町内が湧くが如くになつて見物が押寄せた。見ると白毛の頸輪のある珍らしい老外道であつた。竹松が殺されてからは同地方も安穩になり、半市方も續いて一家死滅をした。

錢を咬へて行く 竹松の家から東方廿町ばかりの宇赤松なる農家の集團地に内藤權十と云ふのが借家をして小店を開いて居たのであるが、毎度のやうに錢箱の中の錢が不足するので女房を疑ひ、毎度喧嘩をやらかし女房は濡衣を着るは残念だとして屢ば離縁咄を持出した。

夏の或日、權十は店の次の室に横になつて午睡をしかけて居ると、一疋の外道が土間から店戸柵の前へ飛上り、そこにあつた錢箱の孔へ頭を突込んで拾錢札を一枚咬へ出して土間へ下りて北げたのを瞥見した。權十の家主は外道持ちの名のあるものであつたので、此外道はてつきり近所の家主方のだと氣附いたので、騒ぎだてをしないで居ると、やがて又一疋やつて来て、こんどは二錢銅貨を咬へ取て北げた。此

事あつて永い間の女房の濡衣は霽れ權十は匆々他へ移轉をした。

實見家の談に、外道が咬へて来る金品の置場は一定して居る。大抵は臺所の棚のやうな處だと云ふ。外道が主家の田畑を見廻り歩くは、主家の利益を圖る爲である。夏秋の際が一番瀕繁に田廻りをやる時で、自家の田に水が少いと見ると、上手境の畦へ穴を明けて、上手の田の水を落し取つたり、他人の田の稻穂を嚙取つて歸るのは顯著な事實である。出雲、石見では、外道持ちからは田畑は買はない、買うたら附いて來ると信じられて居る。

**嫁入りに追隨** 大田町宇雪見町に以前松花屋なる染物屋があつて、出雲方面の人狐持ちの評判ある素封家から嫁を迎へたことがあつた。其嫁入荷が大田の北端某家まで到着して人足が休憩をして居ると、遙々六七里も荷物の後を追うて來た數正の外道が、土間に下してある長持や箆笥の上や間で嘻々として遊び廻るのが見られた。外道持ちと縁組をすると、必ず外道か分封して來る。若し離縁の場合には隨いて還

ることもあり、居残ることもある。

**外道錢を拾ふ** 前項の三河屋が外道持になつたと云ふのは、先々代の代に外道錢を拾つたが原だと云ふが、其には左の如き傳説がある。

同町に小い夷祠あひすがあつた(今は取拂はれた)。或る月夜の晩に、夷祠のある小路の中ほどに一個の藁苞と赤飯を容れた盆とが捨て、あつた。其を三河屋が拾つたのを隠れて見てゐた者があつた。藁苞には七十貫の錢が紙幣や青銅錢や銀貨やで入れてあつた。其頃の七十貫の錢は、今の相場にして約三百圓近くのものである。此三河屋は一度手をかけた赤飯を元の如くに置き捨て、藁苞ばかりを提げ歸つてから、同町内の佐々木屋へ行き、先刻夷さんの小路に赤飯が捨て、あつたが、妙なことだと空とぼけをして話した。

其頃、佐々木屋は外道持ちの富裕家として名の出た人間であつたが、三河屋の言葉に對して、其は疱瘡はうさうの神でも捨てたのであらう、拾はぬ方がよいぞと答へると、三

河屋は瘡瘡の神だか外道だかわからぬけれど拾はぬがよからうと言つて立去つた。此事があつてから間もなく三河屋は納屋を新築したり畑を買つたりして大に發達ぶりを示し、同時に又外道が居ると言はれ出したが、其に引換へて、佐々木屋はいつしか外道の臭ひが消えて町民から親しまれるやうになつた。

遊動する氣瘤 狐狸、外道の類が憑いたと見做される人の上軀、殊に手に突然蜜柑大の氣瘤が發生して不隨意的に各所へ移動することは、昔から認められて居り、昔の人は之を憑物の本體と信じ、現代の醫學にては、ヒステリー症患者固有の病的現象であつて、主に血行の不良による瓦斯の停滞などであるやうに説いてあるが、果して何れが正しいか。數年前のこと例の大田町字粕戸の板根活版所の六歳になる男兒が、同地の小學校の運動場の横にて、一疋の外道の徘徊するのを見て、妙なものだと思つて眺めて歸ると、其夜から變な精神状態を呈して、さまざまのことを口走り、また兩手が強直して動かし難くなり、總身が顫へ出すやら發熱するやらで、

親が心配をして醫者を迎へたら、バラチブスの下地があるとか診斷をした。

然るに、突然肩の下の方へ例の氣瘤が出來て、手の各所を遊動するから、此奴或は外道が來たのではあるまいかと疑ひ、某祈禱師に伺はすと、學校の横で俺を見て嫌な奴だと思つたから取ついたとの事だと告げてくれた。仍で息子に訊ねると其通りだと云うた。遂に翌日、外道の希望する某場所へ息子を連れて行つたら、地上へ倒れてから、起上つたが、是で常態に復した。

左に外道に限らず、一般的憑依物に發生する遊動瘤の事例を掲げる。

一 京都市外の△嵯峨に君原嘉重と云ふ禪學凝りの人物があつて故禪僧たる南天棒門下の逸足で、十五ヶ年も禪修に努めた人であつたところ、大正八年、或日心機一轉し、爾今禪修行を廢止する決心をした。其理由は、今日の社會に禪修に凝つたところで、何等利益がない、利益が無いどころか寧ろ不利益で社會的活動が出來な

い、畢竟時代に適應しない人間になると云ふのであつた。

斯く決心をしてから、毎日の業にして居た座禪をフツリと廢止したところ、俄然奇怪な現象が起り出した。いろんな妖怪的な物象(主として骨體の怪貌者)が見へたり、就眠しようとする、何者かゝ來て目をせゝり鼻をせゝりして寢させない、最初は何の故とも覺さられなかつたが、後に至つて禪魔が廢禪の志を挫かうとして邪魔するのだと知れた。毎日苦しめられるのがつらく、遂に神道家にすぶ縋つて靈力で鎮めさすより法が無いと考へ、静岡縣の有名な長澤雄楯翁へ頼つて行つたけれど無効であつたが、いろ／＼して遂に禪魔を體内から驅逐することが出來た(長澤翁方で現はれた珍無類の奇蹟事は別者に詳述した)

愈よ憑依の禪魔が脱落する段になつて、君原の右腕の上部に突然桃實大の氣瘤が現れて腕首の方へ移動するのにコロ／＼と云ふ音響が當人に聽へた。此音響は幻音などでは斷じて無かつたと云ふ。而して氣瘤は段々に移動して指の附根つけねに至て梅實

大に縮小し、後には人差指を前進したが、最後には指の腹を半寸ばかり堅裂に裂いて、其處から鰻の膽のやうなものがダラリと出現して疊の上へ落ちて消え失せ、指の腹の裂け目は其後に癒着したけれど、永く痕跡を残して居た。かくて君原は禪魔の妨害から免れて安穩を得るに及んだ。

二 大阪には俗稱豆狸まめたぬきなる妖獸があつて人に憑くこと彼の外道の如くで、實見者は堅く其實在事たるを信じて居る。明治四十年頃のこと、大阪東區谷町七丁目の某に豆狸が憑いて、醫師ではどうしようも無いからとて著者の知人たる靈能者のD君をわざに京都府から迎へた。

D君は往つて見ると、患者の居室の書物棚の後ろから二三疋の豆狸の出沒するのが見へるけれど、其處の家族には見へなかつた。患者に術を施すようになると、患者の左腕に突然彈力ある氣瘤が一個現出して、手首の方へ移り行き、遂に拇指の中ほどへ縮小して前すんでから、逆戻りをして隣りの人差指に移ると、指の尖端から灰色

の水飴のやうなものが脂下<sup>やにさが</sup>つて疊へ落ちて、小饅頭程の形になり、迅速にキリキリと數回旋回運動をしてから、ヂツとして動かずに居る。

時は眞夏の暑い盛りの午後一時頃で、表の街道を白服の巡査が巡回して來るのが見へて居たが、巡査が此家の戸口近くへ來た時、彼の小饅頭のやうなものが突然疾風の勢ひで飛躍して巡査の胸倉へ取ついた。其と同時に巡査は俄然發狂状態となり、腰なる洋刀を拔出して頭上にて水車の如く振廻し乍ら、八丁目の方へ疾走するので數十人の大供小供が後からワイ／＼いつて附いて驅出した。其後の巡査のことは知られないけれど、此方の患者はそれきり全癒した。

同じ氣瘤でも、甲者は皮膚を裂傷させて脱出し、乙者は皮膚の氣孔から脱出するの不同がある。是は憑依物の勢力の強弱の差異に依ることは明白である。此氣瘤は概して人體の上半部に現れ、腹部以下には現れぬものであるが、醫説がヒステリー患者に限るやうに言ふは、まだ研究の堂に到らぬもの乎。

**味噌壺を優す** 松江市北田町に、人狐持ちの風説ある山根氏があつた。曾て其右隣の村田氏方で臺所戸棚の味噌壺の蓋を退けて見ると、溢杯<sup>いっはい</sup>に充盈させてあつた味噌の上面に貼布されてゐた白紙の中央部に、二錢銅貨大の穴が明いて居た。奇妙なことに、思ひながら紙を剝ぐと、穴は味噌の下層へ通じて居るので、子供が竹でも突込んだことかと想ひ、味噌を掬ひ取らうとして杓子を入れると、天井でも押落したかのやうに、味噌が底の方へ落込んだので吃驚させられた。能く檢べて見ると、隣りの人狐のわざに相違なく、味噌の上層だけ残して、内部は全部喰ひ取つてあつたのだと知れた。人狐の胴の太さは、肥大な溝鼠よりも稍大きいから、味噌の穴の太さの二錢銅貨大に過ぎぬほどの小さいのに引較べても、矢ッ張り奇怪味が饒<sup>うた</sup>かである。

**數十人を惱ます** 出雲國簸川郡朝山村の某所にて、區民が新年宴會の意味で或る協議會の名の下に集合し、酒宴に移つたところ、宴最中に俄然一人が發狂的になり、



目の色を變へてベラ／＼他家の秘密事件を、無遠慮に饒舌して始末に終へぬので、外道が來たとて騒動になり、神職を迎へて祈禱をさすやら、彼の者の家族を呼附けて介抱さすやらで散々な宴會に終つた。

然るに其翌日から彼の集會者は一人々々片ツ端から同じやうにやられ出すので、一村大騒動に及んだことがあつた。是は彼の區民中に一人の外道持ちと云ふ家があつて、彼の日の集會に案内されなかつたのを腹立ち、其家の外道が復讐的にあばれ廻つたのだと知れた。外道の多い地方にて、斯んなに大掛りの外道騒ぎはついに無いことであると言はれた。教師や郡吏やが心理學說によつて、傳染性自己暗示と云ふものだと云うて聞かしたけれど、正直な村民は承服しなかつた。

女學生に憑く 東都方面で奏任待遇の女教師をしてゐる女子高等師範出の才媛の若原八重子(變名)と云ふが、まだ郷里の松江高等女學校時代の出來事である。該女は其頃松江市西茶町の或裏町の奥の小さい借家に、母親と妹と弟と四人住まつて居り、

父は伯耆の米子に別居して代書業を營んでゐた。八重子は學業が優ぐれ、性質も温順寡言で、一級中の目標になつて居た。

然るに、ふと八重子が其家で時々妙な精神状態になつておシヤベリをすることがあるので、母親は八重子に外道でも障つて居るのではないかと心配をし始めた。或日八重子が女學校から歸つて來て袴を脱ぐや否や、踊るやうな身振りをしてゲラ／＼笑ふので、母親が胸倉を捉えて睨みつけて「判つたぞ畜生、逃げぬと締め上げてやる」とてエライ氣勢で威嚇して見ると「逃げます／＼許して下さい」と言つて靜まつたので、爾來母親は一層注意をして油断なく保護をしてゐた。

其年の十二月の三十一日であつた。八重子は母親に對つて「明日の元日には雜賀町の玉木さんが必ず來いと仰有るから行きますが、母親さんのも宜いから、あのお召の裕を貸して下さい、袖は私が短かく直しますから」といつた。平素母親の教訓に服して、極度の質素を守つて居る八重子の今の言葉は異常であるから、母親は驚

いて、おまへは何と云ふ阿呆かネ、此押つまつた日にお針をする際はありませぬよ、夫に女學生の分際で絹衣を着ておめかしをするのかネ、明日は學校で式を終つたなら直ぐに歸りなさい、何所へも行くことはできません」と叱つた。

すると八重子は、眼をつり上げて「フム、代言人、饒舌るな、親爺に嫌はれたのも其口があるからだ、フム」とせゝら笑つて横を向いて舌を出した。母親は一時は嚇としたが、是は例のダナと直ぐ氣がついたので、其上は叱りもせず沈黙をして居ると、八重子も温和な態度になつた。

然るに元日の夕方、八重子は又も常態にない言動をしたので、母親は八重子の胸倉を捉へ、出刃庖丁を擬して、今日こそ白状しなければ突殺してしまふと烈しい勢ひを見せると、八重子は「言ひます／＼皆言ひます」とて左の文句を口から吐き出した。

『わしは同級の下代の家から來た(下代の父親は松江の裁判所の判事で、人狐持ちと云ふ家筋)。家

の嬢が、いつも八重子に負けるのが口惜しい。何時か八重子が、算術の答式を黒板に書かせられた折りには、其袴の下から出て、袖口に上り、書く後から／＼と爪で引搔いて下側の字を皆消してやつたが、其時は恐ろしかつたので、いゝ加減にして袴の裏へ隠れたこともあつた。又去年の夏は八重子を屋根へ飛上らしてやらうと思つたが勘忍して代りに弟の庄一を騒がしてやつた。其から今度残念であつたのは、鼻の奴(母親を指す)に邪魔をされたことだ。玉木で御馳走をして待つて居るから、刺身を三四杯替へて喰つて、皆の前で赤耻搔かしてやる企みであつたに——』

斯く言つてから八重子はケロリと常態に復した。スルと三日の朝、雑賀町の同級生が來て、元日と二日の兩日、玉木さん方で大層八重子さんの來るのを待つて居ましたが、八重子さんの膳が大事に床の上に置いてあつたら、二日の晩に、何が來て喰べたか、お刺身や蒲鉾なんか魚氣は残らず喰つてしまつてあつたので大騒ぎでしたと告げた。

喰つたのは下代しもだいの人狐であることは分明である。又去年の夏、八重子の弟を騒がしたと云ふ事實は斯うであつた。深夜熟睡中の十二歳の庄一が突然刎ね起きて、旅順口へ行くと叫び庭の樹を攀ちて屋上に登り、右に左にと駆け走り、最後に地上へ轉落したところを母親に取押へられたが、彼は落ちても怪我もなく又痛みもなく平氣で、其儘再び蚊帳の中へもぐり込んで寝てしまつたのであつた。

入念の外道 動物の外道げだうでなく、人其者が外道の質を有つのがある。石見國安濃郡川合村川合に那須清吉なる農業兼木挽職の人間があつた。或日居村の勝本國市方へ行き其所有の林木を買受ける約束を爲し、代金は數日内に渡す筈にして、翌日本を伐りに行き、半日ばかりも仕事をして居ると、急に熱發をして難儀をするやうになつたので、仕事を中止して我家へ歸つて臥て居ると、國市が見舞ひに來た。清吉は國市の顔を見ると忽ち國市の女房は外道持ちで評判の婦人だと云ふことを想起し、自分が代金を支拂はずに木を伐るので、彼女が金のことを心配し、それで外道がや

つて來たのかも知れぬと想うた。

仍で國市に對ひ貴君ききみは代金の事を心配するのも知れぬが、間違ひなく支拂うから安心するやうにと言つたら、國市は迷惑さうにして、自分は金のことを疑つてはゐないと辯明して歸ると、清吉の加減が俄然良くなつたので、外道げだうは納得なつとくすると落ちるものだと云ふが實際だと感心した。

然るに清吉が快くなると、二男の藤吉と云ふ少年が同じやうに熱發を惱み出して二日間學校を缺席したから、祖父が案じて、隣村大田の西行堂へ行き、庵守あんしゅに拜んでもらうと、是は金錢上の事から外道が來たのだと告げられたので、さては外道は退なげかずに居たかとして、早速國市方へ木の代金を支拂つたら、藤吉の病氣は直ぐに癒なほつた。

其事があつてから約一年ばかりの後、或日清吉は國市方の前を通行したので、立寄つて見たら、國市が折角會ひたかつた所だ談はなしがあるとして土藏の中へ連れ込み、妙な

ことを訊ねるやうだが、去年おまへに木を賣つた時、家の女房の外道がおまへ方へ來たと云ふ風説を聞いたが、實際かと言つたので、清吉は、そんな事は無いと言つて安心させて藏から出ると、今度は國市の女房が呼込んで、私に外道が居ると言はれたさうだが、自分は全くそんな物を有つて居らぬ、今後は宜しく頼みますぞとて眞顔で嫌味を言つた。斯くて清吉は我家に歸ると、二十分ばかり前から長男が急に熱發をして難儀をして居るので國市の女房は矢つ張り外道持ちであると知つたと云ふ。

## 蛇

### 解 說

人によつては、蛇は愛すべき動物であるやうに言ふものがある。又田舎によると、蛇でも捕ると大に怒鳴る農夫があるが、是は蛇は鼠や苗代田を荒し廻る蛙を喰ふので、益蟲であるとの見解から來たことである。又動物學者は、蛇は古來人間の誤解や迫害を受けて居る不幸な動物であるやうに云つて居るが、是も亦蛇に對して誤解を有つてゐる人間である。

無害の蛇を飼養して馴れさせたら、可愛らしい情も起るであらう。又害蟲害獸を捕

食する點から見れば益蟲とも言へるであらう。又動物學者が、謂ゆる學問的に蛇を見れば、生きた動物を捕食する爬蟲類たるものに過ぎないで、其外に何等の刺戟も感想も起さないのである。

然し、蛇は一般人には好かれない動物の第一たるものである。如何に無害の蛇が人に馴れ親しむにせよ、如何に又苗代田を荒す蛙や畑物を食ふ野鼠類を捕食するにせよ、或は又如何に滋養食餌として有價値の動物たるにせよ、人は決して蛇を尊敬も愛護もしたくない事實が見える。比較的蛇を恐れない人でも、蛇は嫌やな奴だと言つて居る。猿や雀燕などの小鳥も極度の憎惡を以て蛇に對することは能く吾等の實見に觸れることである、雀が庭先や屋根の上の蛇を見る時に、狂亂的に騒鳴するのは誰も知つてゐる。人間でも女子は、男子よりも強度の憎惡と恐怖とを蛇に有つことは是も顯著なことである。

何故に蛇が人間に嫌はれるかと云ふと、形貌の醜惡なことよりも、蝮や、ハブや響

尾蛇やゴブラのやうな恐ろしき咬毒あるものが居ることよりも、又途方もない巨體の蛇があつて、家禽家畜を呑み、時としては人をも呑むことよりも、蛇の特有なる魔性の力なるものを忌むのが最大の原因である。

蛇の魔性と云ふは、自體より大なるものを呑み、足なくして音なくのたくり歩いて人家に入り、或は閨房に潜み或は男莖を呑み、甚しきは婦人を昏睡せしめて之を魅烝し、或は其陰所に竄入して之を死亡せしめる。(大正年代に入ても帝都新宿方面なる某蛇屋の妻女に其實例がある)。生理的に奇怪であるが、精神的にも奇怪な能力を有つて居るのを云ふ。蛇の屈伸自在な體制が、其陰險性、執着性、淫蕩性、魅惑性等の好ましからざる性習の實行に適するのは、天地の機能の惡跡だ。世界のあらゆる自然科学的動物學書に、蛇の魔性のことの書いて無いのは、動物學者が、知つて居ても書かぬのか、知らぬから書かぬのか。知つて居て書かぬとせば、魔性のことは非學術的と思つてのことであらうか。又知らぬとせば、外國主として西洋諸國の蛇は、平凡

の動物であつて魔性的でないからか、又は魔性的の能力は我國や支那などの蛇と同様であつても、觀察の眼力が無くして、其頭腦に映じないからの事であらうか。吾等の想像では、西洋の蛇でも、魔性的能力は殆ど東洋の蛇と同じやうであるけれど、西洋人の觀察が粗笨であると見做すわけがある。

曾て英吉利の某動物心理學者の著書にて、蛇の精神力の事例として唯一つの事實が書いてあつたのを見た。其は公園の樹上に栗鼠が遊んで居た處へ、下へ蛇が出て来て栗鼠を見詰めてゐると、栗鼠がツツづいて樹上で一進一退し乍ら、追々に幹を傳つて下りて来て、遂に吾と吾身を蛇の巨口中に投じたのを見たとして不思議がつた書きぶりであつた。是は動物の平凡なる磁氣力の一例だけけれど、唯物式に固まつた土地の民族の學者だから、鬼の首でも獲つたやうに喜んで書いてゐた。併し時代の思潮の流れたるものか、時代は我國人をして追々と古來の國民性心理を捨て、行き、女でも蛇を見て唾を掛けるやうなものは二三十年來滅切少くなつた。心臟病の女が

死にかけて居ても、必ず其病が癒るものと信じ乍ら、蝮酒なら飲まぬと主張した様な女は今日には見られかねるやうに成つた。死ぬるは嫌だが、嫌な物は死んでも口にせぬと意地ばる所が、日本婦人の特質的美點の發露であらう。婦女が蛇を嫌はぬと云ふのは著者に言はずと一種の精神癡痺症で曲ごとだ。往年東都の日向某の美妻が、バスケツトの中へ青大將を入れて旅行し、汽車中に其蛇をヌタクラして人が騒いだら、笑つて袂の中へ摺んで入れたのは美の凄味を加へるお化粧行爲だと稱した新聞記事を見て、怒つた國民も、今では蛇を滋養食餌としたり藥劑にしたのを平気で服用するほどに謂ゆる唯物文明式に進化した。其と云ふのも、山澤が年々に拓かれて、山の主とか池の主とか云ふ怪蛇や野良の人呑大蛇などが減少したことも遠因若くは近因である。蛇の魔性的能力も、見えない太陽の何々外光線やラヂオの電波が縦横無盡に飛廻るやうになつた世界だから、これも亦追々に衰退するであらうから、今の内に少し書きとめて置くのも無用ではあるまい。

蛇類を人や猿が好かぬのは、其性習にも無論好かないが、第一其體貌が嫌に出来て居る。蛇にもし足があるとか、角があるとかするならば、却て感じが良くなるに相違はないと想ふ。蛇の眼と蛇の腹の黄白い鱗きじろを見ると實に嫌な感じが起る。一昨年長女が山へ摘草に行き、或古壘の前に立つた時、石垣の穴の口に可なり大きい蛇が頭だけのぞかして此方を見詰めてゐた其眼と長女の眼とが偶然一線になつた刹那、長女は蛇に吸ひ込まれるやうに思つたとて、歸つてから身ぶるひ附けて話した。同じ爬蟲類でも、蜥蜴とがけの眼は瞬きの出来る眸まぶたがあつて凄味が無いが、蛇の眼は眸がなく、眼玉も動かないので、特に他を魅するに適して居る。但し蛇の眼は單に外觀的構造の爲に他を魅惑するのでは無く、眼に或超物質的な力があることは、如何な唯物萬能家も否定は出来まい。(卷末見解欄参照)

著者は曾て蛇の交尾季に於て、其性的執着力に關して一驚を喫きつした怪奇な事實を経験し、性と妬心と執着との共通の惡徳から推しても、蛇を爬蟲類の一種として單純

な觀察を投與して安んじてゐる一般の動物學者等の心事を異むものである。蛇中には無害淡白な性習の種類もあるけれど、概括して、妖的怪物の實質を具備して居ることは誣いつはりの難い。蛇の嫉妬深く又執念深いことは小説的だなどと云ふ人が少くないけれど決して小説などでは無く、儼とした事實である。彼の亞弗利加の北部の砂地に栖すまむ一種の蛇に、嫉妬心の強いので有名なものがある。其蛇は砂の中に躰を埋めて頭の尖端を僅かばかり出して居り、小鳥や蛙や鼠ねずみだの、とがけの、通るのを待つて、飛蒐とがけつて捕るのを見ると、仲間の奴が、直ぐに驅け出て其獲物を奪はうとして争闘を始める。其争闘の爲に、獲物が逃げ出すことがあると、一疋の蛇が其を逐おそひかける。スルと他の一疋がそれを妨げにかゝり、遂に獲物を完全に逃して了うことが少くない。

蛇の嫉妬心、執着心の深い動物たる所以が、輪回再生を信する人をして、とよ婦又は失戀男子が蛇に更生し、又は其亡魂が蛇に憑依して目的人に纏綿とよし、又は恨みある

人の首に捲きついて離れないと云ふやうな東洋的宗教的な妖的事實を發生さすと想はせる。何にしても蛇はただ物では無い。

## 事例

小蛇の怪口 鳥根縣安濃郡刺鹿村大字西川に傳六なる馬追職があつて、夏の或日、素足の草鞋穿きにて居村の猪谷みぐたにの山奥へ秣刈まきさかりに行き、仕事のあひまにトある樹の根に腰をかけて空の方を眺め乍ら煙草を吸つて居たところ、右足の拇指の腹が、チク／＼と物に擦こぐられるやうに覺えたので、足を見ると、三尺許りの烏蛇くろへびが來て居て舌の尖端さきで拇指の腹のあたりを、甜なぶつて居るのであるから、面白半分面白半分に其を見てゐた。

蛇はやがて口を開けて傳六の太い拇指を呑みに懸つたので、馬鹿な奴だと思ひ乍ら

すけて居て、咬へ煙管で見て居る内に、蛇は譯もなく指のつけ根まで吞込んで了つて、隣りの指をも頬張つたが、其も亦苦もなく附根まで吞込み、而して次には其隣りの中指をも口にした。口は奇妙に横さまに擴ろがる様だ。やがて中指を吞んで了つてから第四の指をも咬へた。小蛇の口は全く際限なく横へ擴大する。

茲に於て傳六は大に驚いた。これまでは見てゐたと云ふものゝ意識は半ば癡痺してゐたものゝやうで、唯だ奇妙だ／＼と感じた計りで、危惧心などは更に無かつたのであるが、今や精神は濶然として蘇生したやうになり、此蛇は油斷のならぬ怪物だ斯うして委かして吞ませるなら、終しまひには足でも吞むであらうと恐しくなつた。そこで、身邊にあつた熊笹の小枝で、煙管の煙脂やぶを浚ひ出し、蛇の口の邊に無茶苦茶に塗りつけた。

蛇には煙脂ほど大毒なものはない。如何な蛇でも煙脂をなすくられたら最後、見る間に色まで變つて死んで了ふ。彼の怪しい烏蛇も毒攻めにかゝつて慌あわて、吞んだ四



本の指を吐出し、愴惶として下手の溪川の方へ北<sup>北</sup>げて往つた。傳六はさまア見やがれと嘲笑を残し草を脊負うて家へ歸つたが、其後二三十日して、また刈草の爲に猪谷の山へ入り、前回の場所近くに行つた時、彼の溪川に沿ひ一丈餘の蛇の白骨が横はつて居るのを見て、是ぞ彼の怪蛇の正體であらう。奴は口の煙脂を嗽ぐために此溪川へ來たけれど、毒が劇しくて其場を去らず死んだのだと想ふと、今更蛇の魔物たるを覺つたと云ふ。

◇

大きい蛇が小蛇にばけると云ふことが事實であるなら、其は暗示術で幻視を惹起さすのであらうけれど、又場合によつては、實際に體を縮小さす怪術があると見做される事實が現にある。縮小させると云ふのも、胸へ詰め込んだ息を呼出して胸や腹の小さくなると云ふやうなことでは無く、五尺の蛇が三尺の蛇に成ると云ふやうに一時間現象乍ら、根本的生理的縮小なのを云ふ。曾て某神道教會の信徒たりし和歌山縣

の某が、邸内にて黄褐色の小蛇を見た時、鎌の先きで軽く其尾を切つたら、三四寸ばかりフツリと切斷した。然るに某は其日から病名不詳の疾患に罹り高熱を發し難儀をするので、祈禱師にかゝると、大きい蛇の尾を切つたので其蛇が祟つたのだから、蛇に詫びごとをするがよいと告げた。仍で某は、自分は小蛇の尾を切つた事實はあるが、大きい蛇の尾は切らないと言つたけれど、家族の勸告に従ひ、とにかく祈禱師を通じて蛇に詫びごとをしてもらつたら、病氣が快癒した。すると其後邸内で七八尺ばかりの黄褐色な蛇を見たが、其蛇の尾端が七八寸ばかり切れて居たのでさては前に小蛇の尾を切つたと思つたのは、全く此大きい蛇の尾を切つたのだらうと今更驚いたと云ふ事を聞いた。

大きい蛇が小蛇に化けたと云ふ事は、昔から多く話されて居るけれども、反對に小蛇が大蛇に化けた事例が無いと見ると、蛇は老大にして始めて魔力が具はるものたるは明白である。昔の話ではあるが、大きい蛇が小さくなつて見せた事例で一寸面白

事

例

いのあるから記載をする。

安永七年越中國下新川郡三ヶ村の農夫長右衛門の門先に大松があつて之を伐採し、同八年三月其切株の下に蟠つて居る大きい根を掘起して他に之を運びかけたとき、松の根の底に一疋の蛇があつて三尺ばかりのものに見えたが、何となく恐しいので、松掘りの人夫どもが、此奴は主らしい面をしてゐるから、此儘土をかけて埋めようかなど、言つた。長右衛門は其を聴かず、怪しな奴は取捨てるがよいとて杖を入れて刎ね出しに懸つたところ、初めのほどは軽くて動かし得たが、後には重くなつて杖にては動かし難くなり大勢で鐵棒などを入れて刎ね出して見たら俄に五六尺ばかりの蛇となつた。

長右衛門は之をまろばして海邊へ捨てた處、水に入つたと見ると、すぐ立上つて來て長右衛門を追ひかける、此時に蛇は一丈餘の體に見えたので、長右衛門は驚いて疾走し、道に堀があつたのを幸ひに、其堀を横に飛び縦に走りして忠右衛門と云ふ

もの、家へ飛込んだが、蛇は一直線に長右衛門の宅へ入つて見失はれたので、元の松の跡へ入つたとも言はれたが、實際はどうであつたか判らず仕舞ひになつた。然るに其夜から長右衛門は發狂し、横に倒れて這廻る態は蛇に等しく、大なる石を臥乍らに打返す力は十人以上であつた。遂に弟等が大勢して柱に縛つて置いて野へ仕事に出た後へ、一人の馬士が來たので、長右衛門は自分の口へ、そこらの草を一トつかみ入れて呉れよと言つた。馬士は氣の毒がつて其通り草をやると、暫くして繩をブツ／＼押切て手を振て立出でた。弟は之を知て復も大勢で縛つて置いたら其夜長右衛門は狂死をした。

人の生血を吸ふ 福島縣北會津郡小山村に建福寺と云ふ寺がある。慶應元年、或夜其時の住職が外出先から歸つて見ると、梵妻が蒼白くなつて寢て居て、口をアングリと開けて居り、口から赤い糸のやうなものが一本出て居て、天井の方へ續いて居るのが行燈の灯に見えた。

怪しく思つて天井を見ると、一疋の白い蛇が、天井板の間から頭を出して居て、彼の赤い糸が其口へ通じて居る。そこでよく見ると、其赤い糸のやうなものは血である、梵妻の生血を蛇が遠くから吸取つて居るところだと知れたので大に驚き、棒を持つて来て蛇を殴りつけて殺して引下ろして見ると三尺五六寸ほどあつた。蛇を殺してから供養をした爲であるか、後に何の祟りも無かつた。(若松市のH氏談)

どうして蛇が、人の體外から人の生血を吸取るかは科學では判らぬ。このやうな怪力は蝦蟇にもあり、又稀に鼯にもある。蝦蟇が室内の行燈の燈油を糸筋の如くにして七尺ばかりの外の縁の下へ吸ひつゞけてゐたことを昔の何かの隨筆本で見たことがある。又鼯のことは、田舎の人が間々話すことで、鶏から一二尺ある距離に居て鶏の生血を吸ふのださうな。聞いただけでは信じられないやうであるけれど、動物中には奇怪な能力を有つものがある。

人間を睡らす 一 大正九年夏、出雲國簸川郡の東村から同郡佐香浦へ越える山路

を三人連れで行くのがあつたが、一人は鍛冶職、他の二人は夫婦であつた。

三人は山路を約三十町ばかり進むと、夫婦連れなる亭主が用達する爲に路傍の雜木の中に入り、女房は鍛冶屋と二人で先へ登つて行くを四五十間ばかりにして、路の横に薪小屋があつた。炎天で暑かつたので、二人は小屋の入口の日蔭にシャガンで風を容れ乍ら休息をすることにした。其容子は下方にて用達をして居る亭主によく見えて居た。

やがて亭主は用達を終へたので、二人の後を追うて坂を登り出したが、二人の者が小屋の蔭から出て來ぬので、疑念を生じ急いで近よつて行くと、小屋の上に洗濯盥ほどの大きな圓い物が日光に映じてキラ／＼と光るのが見えるから、之をも怪み乍ら小屋の眞下へ來て仰ぎ見ると、小屋の屋根に胴廻り二尺近い大蛇が蟠居して居て首を下へ伸してねらつて居り、其下方には、彼の男女二人が膝を突合せ乍ら餘念なく睡つて居る。亭主は驚いて大聲を揚げて呼び覺ましたら、二人は目を覺しさまに

飛出して路へ下り、其より三人は懸命に驅出して佐香浦へ下りた。

話を聴くと、二人のものは薪小屋の口へ腰を下すと、何となく嫌な臭氣があり、間もなく強い睡氣に襲はれてから、其儘睡つたのだと云うた。又彼の小屋の上で光つたものは、大蛇の鱗を照す日光が反射して居たのであると知れた。

二 數年前のこと、同國仁多郡八川村にて、養蠶をする某農家の女房が、妙齡ところの娘と二人で、山畑へ桑摘みに行き、母子少し別々になつて摘んで居たところ、いつしか娘が見えなくなつたので、母親が來て見ると、娘は柿の木の根元で肱枕をして睡つて居り、其の頭上五六尺の枝に四尺計りの蛇が居つて、首をのして娘を見入つて居るから、母親は土塊を投げつけて蛇を追逃がし、娘を呼び起して連去つた。娘は桑摘みをして居るとむやみに睡くなつたので、わざと柿の樹の下へ來て寢たのだと云ふ。すべて蛇に魅せられて睡るもの、夢心地の實情を知りたいものだが、慥かに婦女子には秘密が伏在すると想像される場合もある。大蛇が人を吞まんが爲に睡らすのと、性情の爲に睡らすのと自ら相違がある譯だ。

三 大正初年のこと、岐阜縣の田舎にて某農家の美婦が(住所姓名を忘却した)毎朝畑仕事に行つて夕方に歸來するのであるが、歸つた時には非常に疲勞の色があるので、良人が怪しみを生じ、或日突然妻の仕事場へ行つて見ると、妻は畑に藁を敷き、其に横はつて深い睡りに入つて居るから、ゆすり起すと、其下から二尺餘りの蛇が這出して逃げ失せた。良人は嚴しく詰問したら妻は自白して曰く、近頃毎日此所へ來て仕事に取かゝると、きまつた様に強く睡氣がさすので、斯うして臥るのである云々。よくわからぬが、睡るのは二三時間に及ぶらしいとのことであつた。此美婦の奇怪な午睡は、固より蛇の爲すところであるが、何の目的で蛇が連日この農婦を睡らすかを想像するがよい。想像して何になるかなど、輕視するは愚だ。吾等は之を以て、心靈問題若しくは宗教的信念の上に輕るからぬ神秘事項を髣髴せしめる。

## 古人の記述

安永年間のこと、讃岐の高松の林と云ふ區域に二棟の土蔵があつて、其間が二間餘り隔て、居り、其一つの土蔵の窓の廂に雀が巢をかけて出入してゐた。或日、五尺餘りの蛇が、此方の土蔵の屋上に登り、彼の土蔵の廂の雀の巢を見附け、此方の屋上から飛びかゝつたけれど、向ふの土蔵に達せず途中で落ちた。けれども樹を傳つて再び元の土蔵に上り復も向ふを見かけて飛ついたなれど、前同様に不成功であつた。

けれど執念深く同じことを繰り返すこと晝夜十日ばかりに及び、精根を悉くして勵み、追々見物人が増して騒動に及んだ。蛇は最終の日には、飛つかずに終日雀の巢を眺めて居たが、其内に又飛かゝる勢ひに、口から小蛇を吐出した、小蛇は目的の

廂に飛附いたが、母蛇は其儘に空から墮ちて死んだ。然るに小蛇は、巢の中へ這込んだが、暫時の内に忽ち二三尺の大蛇となり、雀の子を皆呑んだらしく満足げにして出て來たので、人々が憎ましく思ひ、竹で叩落して殺して捨てた。此怪事を右の林守の畑氏の老人が、廣野清介と云ふ江戸住みの若い士に、自分の若い折りの實見談だとして數度話して聽かしたけれど、廣野は信じなかつた。

然るに文政十二年の夏、廣野の近隣、小石川牛天神下の武家の小者が、一疋の蛇を捕へて、焼火箸で腹を幾度となく逆まにこいて娛んで居ると、蛇は苦しさの餘りに死ぬる時、口から小蛇を吐いた、而して小蛇は彼の者に突撃をして來たので小者は恐れて逃げ出したら、朋輩が小蛇を打殺した。此事實から廣野は畑老人の話を信ずるやうになつた。(想山著聞奇集)

又右同書に文政の初年、京都三條の佛現寺住持の住賢と云ふが、越中ふるこの證興寺に逗留中のこと、同寺の本堂の裏の高い塗籠藏の屋瓦の間に、雀が巢をかけて雛

を育て、居るのを、下から蛇が見付けて、二三日巢を眺めてあせつて居たが、遂に棹立ちに真直に立上つてから倒れて夫つ切りに死んだ。然るに不思議なことには、其と同時に、屋上から雀の雛が數羽墜ちて来て死んだので、其一羽を剣で見ると、腹の中に一寸餘りの小蛇が數疋居つたので、他の雀の腹を割つて見ると、何れにも數疋の小蛇が蠢めいて居たと云ふことを、住賢が想山に話したと云ふ。(同上)

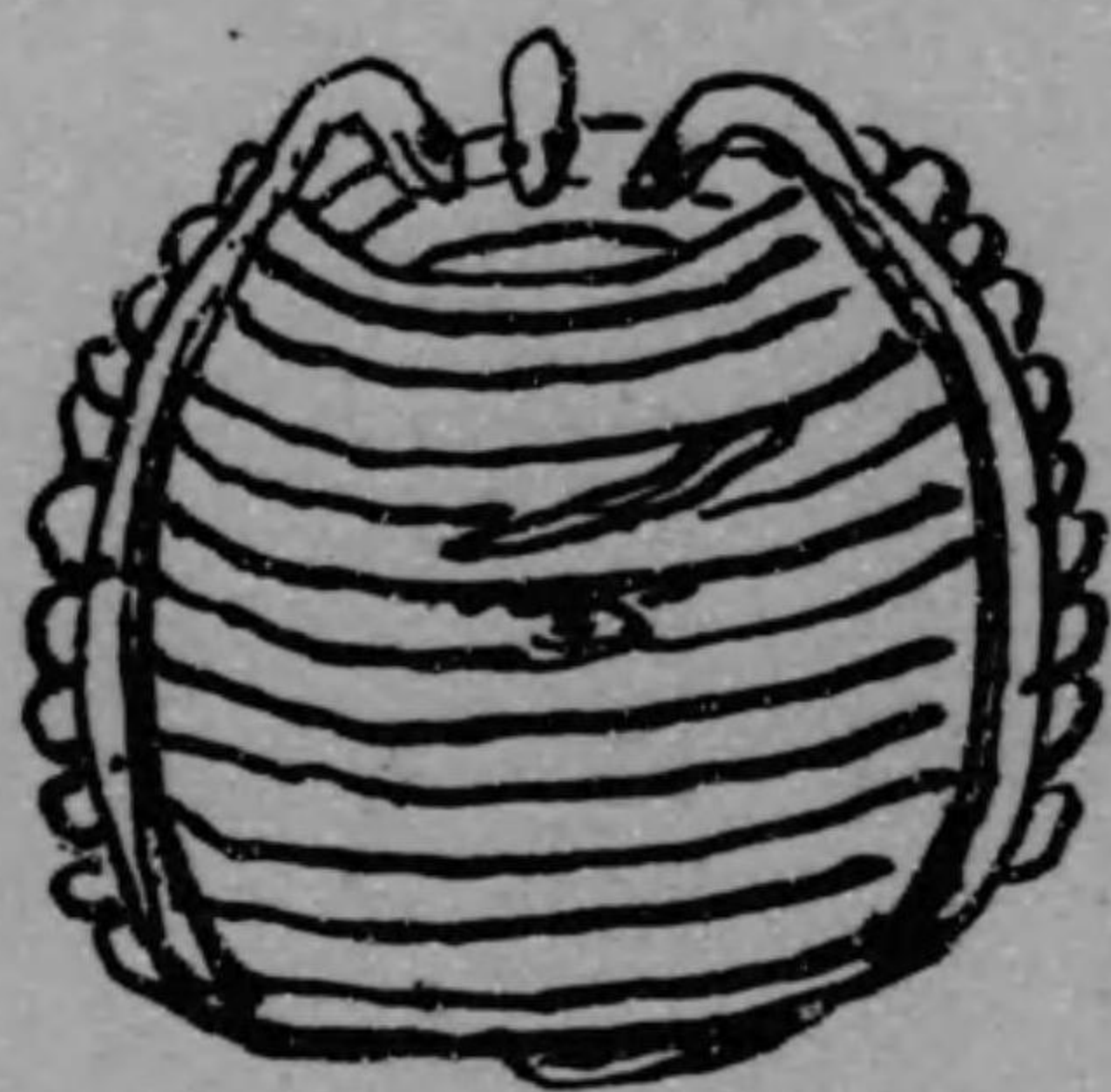
江戸半藏御門の内、吹上御庭の末に、月光院尊尼の御守殿あり、まだ御繁昌のとき或る夏のころ、庭にて蛇の蛙を逐ふあり、侍女どもをして蛙を助けんとて摺鉢の中に伏せしめらる。蛇は摺鉢の上を上りつ下りつして、捲詰め捲ほぐしすること一時計り(今の二時間計り)にして終に身を揉切て摺鉢の上にて死たり。人々今は心安しいざ蛙を出さんとして摺鉢を取退け見れば、いつの間にか蛇ありて其蛙を呑み居たり。人々恐れて悉く逃退かれたりと云ふ。(今昔妖談集(卷末解説欄参照))

文政九年六月二十五日の午後一時ごろの雨上りに、江戸の小石川三百坂の中袋某方

の邸前に於て、十五疋ばかりの蛇が、恰も桶の胴のやうに積み累つて居た。其高さは一尺餘り、圓徑も一尺二三寸で、蛇は三方から頭を揃へて内側の方へ向けて居たが、餘りに奇怪なので人だかりがして居た。其所へ田安侯たやすの小臣高橋百介なるものの子の千吉と云ふ十四歳の少年が来て見て、此やうに蛇が重つて居る中には、必ず

寶があると聞いて居るから、取出して見ようとして、袖をかゝげて右の手を、蛇輪の中に突込んで肱が隠れるまで深く差入れ、暫く搜がして居たが、錢を一個取出して見せた。

其錢は篆文の元祐通寶であつたが、蛇は夫から忽ち散り逃げて仕舞つた。これ全く怪奇と謂ふべきことである。



木村庄右衛門見取圖

此事件は當事の著名事にして數種の書に記せられてある。(兎岡小説外集)

上總國東衛川の河南方村に、左衛門四郎と云ふもの、鼻、作場へ出で、雉の羽敲き

するを見つけて取上げれば、蛇に絡れて居たり。彼の蛇を取放ちて雉を持歸り、汁に煮て隣りの人にも振舞はんとて鍋に入れ鉤かぎに掛けたる時、彼の蛇繩に傳り下りけるを見て皆逃去る。彼の亭主此蛇を打殺して鳥汁を喰ひけり。其後蛇彼の者の腹をまきけるを鎌かまにて切捨てけれども、又腹をまきくする程に、後には蛇をも汁に煮て喰ひたれども、終には捲殺されけり。彼の者の塚にも蛇多く聚りける由、響せきの左衛門語るを儘に聞く也。(因果物語)

伊豫國宇摩郡龍池の庄屋、龍池忠右衛門の屋敷は、昔し龍の住みし淵を埋みて家を造りしとかや、其所に三四尺四方に水少し残りて常にあり。寛永十五年七月十五日一在所の者ども嘉例によりて忠右衛門が庭にて踊りを催しけるに、如何なることにかありけん、忠右衛門夫婦爭論を仕出し、宵より奥の坐敷に入り、八歳になる子を抱きて寝たりしに、彼の子ワツと泣出せしかば、驚き起き見れば、何とは知らず子が片腕を呑みしかば、咽のどと覺しき所をハタと握りて聲を立てしかど踊り最中なれば

暫しは聞えざりしが、とかくして聞附け、踊り子を始め見物の者まで込入り、我も我もと脇差を抜きて彼の化物を切れば、見る内に大なる蛇となる。胸中は白ほどなりしも、人あまたにて取捨つ。さもあれ此蛇はいづくより來りしと座敷の内を尋見しに、蚯蚓みづぢの出入程の穴座の側にありて件の溜水の砂の上に這ひたる筋細く見えしはより出たるなるべしと諸人思へり。やがて忠右衛門煩ひて死し、其より兄弟伯父從弟に至るまで一族七十餘人相續きて死にけるこそ不思議なる。(近世拾遺物語)

山中に蛇怪あり是亦恐るべし、故に山刀を脊中に放たず、山刀脊中にあれば、蟒蛇の呑むこと無し、刀の類無ければ、四日五日の内には其人必ず行所を失す、仲間仲間の馱兵衛は心強き者にて、山刀を邪魔なりとして帶はず、或る時晝九つ時頃の事なり、大蛇の追ふよと覺えて聲を上げて逃げ走る、何れも聲に驚きて出て見るに、纒つづみの溪を隔て、向ひの岸を逃廻る、之を追ふ蛇は見へず只霧の如き物隨ひ附つ、嗅き香のすること甚く風色々に吹廻す。馱兵衛路を失して木に登る。蟒蛇うはづみ忽ち樹に登る

よと覺えて馱兵衛聲を連ねて大に叫び、梢より飛ぶよと見えしが、落して立てず宙にて一呑にしたりと見えて、逆様になりて消失せぬ。蟒蛇寂として又見えず、只白霧の中にありしと覺えて三尺許りの一かたまりの白光りなるもの飛行する様には覺えたり、是蟒蛇の怪なり、氣を以て追ふにや、何としても敵し難し、山刀は暫くも放し難し云々。(三州奇談、越中下新川郡伊折村の伐業源助の語)

昔京都にて夏のころ、市女笠を著た賤しからの風姿の若い婦人が、一人の幼女を連れて近衛大路を西へ向つて宗像神社むねがたの北の道路を行く時、小用を催したくなつたと見へ、そこらの築垣の下に蹲踞うづくまいたが、其儘起たぬやうになつた。

時経て幼女が、ものを言ふけれど婦人は返事もしないでシヤガンだ儘まで居るから、遂には幼女は泣き出した。何でも最初此所へ來たのは午前八時ごろであつたらしいが正午ごろになつても婦人は動かない。そこへ數人の従者を連れた乗馬の人が通りかゝり、女兒の號泣して居るのを見て仔細を問ひ、右の事情を聞知つたので、馬か

ら下りて、婦人の傍へ寄て見ると血氣もなく、息いきはするかしないかの態ていで死人の様になつて居るから、何かの病氣ではないかと想ひ、以前にも斯ることがあるかと幼女に訊ねて見ると、無いと答へた。

仍なほで兎に角と婦人の軀に手をかけて引起しかけたが容易に動かない。其時ふと前面の石垣を見ると、大形の蛇が、石垣の虧隙すきから首をのぞかして一心に婦人を凝視して居た。此奴婦人の尿をするとき情念を發して蕩とらかして此のやうにさせたのであると察し、短刀を抜いて、刃を穴の奥に向けて逆まに立て、置き、従者をして婦人の體を抱へ上げさせて引退ひきひきかせると、蛇は追ッ驅けて出て來て短刀の刃に當り、頭から一尺ばかり裂けて死んで了つたが此時、多くの人ばかりであつた。

さて彼人は、短刀を收めて馬に跨り何所かへ去り、其従者をして、婦人を扶けて送り行かせたのが、婦人は目を明けて人心がついたけれど、困憊を極めて大病人のやうな歩行あるきざまをして居た。その後はどうなつたか一向に知れぬ。(今昔物語)



近世のこと、九州の某地で、或る武人が野道を通る時、一人の若い女があつて、一所で立つたりうづくまつたり、同じことを何度となく繰り返すのが甚だ變へんに見えるので、傍へ行つて、何かしたのかと問ふと、女子はどうか助けて下さい、あれ御覽ごらん穴から蛇が首を出して私を追ッ驅けやうとする、私がシヤガムと首を引ッ込ませ、歩きかけると首を出して追ひつけて来るので、逃げられませぬ、この通りですとて立つたりシヤガンだりして見せると、全く其言の如くである。

其時武士は、よろしい拙者が始末をつけてやるとて、女をシヤガマせて蛇を引ッ込ませて置き、穴の口で脇差を抜いて待ちかけ、女に目配せをして立去りかけさすと蛇が首を伸ばして出かけた。すかさず一刀に首を切落し、難なく女を救つた。(甲子夜話)

江戸神田の者三四人、用事があつて上州へ行く道、川越にて庵寺で休憩をし、其一人が裏へ用達しに行いたところ、井戸側に小蛇が居つたので石を投げて頭へ中て

た。其時庵の一室にて午睡をして居た僧が目を覺まして、血の流れ出る額に手を當て、怒つて出て来て、何故に自分に石を當てたかと詰つた。そこで彼の者が、蛇が居つたから石を中てたのだと告げたら、僧が大に慚愧そんけいをして、井戸の側の石の下より茶壺を取出し、年來貯蓄をした金七兩を其中からつかみ出して、この金を護る一念が蛇と現じたのであらうと告げ、其から庵を棄て、回國の修行に出でた。(譚海)

### 現象に對する著者の見解

狐狸や蛇墓の類が、人及び動物を魅惑し或は憑依すると云ふことを否定するのは、現代科學の謳歌者相當の思想である。其等の人々は、狐狸などは少しも妖術を揮つて居ないのに、愚かな人間が勝手にばかされたり憑つかれたりしたやうに幻覺錯覺を起して騒ぐのであるとて、理窟尤のやうな説明を加へて居る。狐狸にいたされたと云ふ現象中には、如何にも幻覺や錯覺事件もあるが、眞實の現象も確かにある。總ての生物は、生理力の外に精神力があるが、其二種の力は概して、人なり動物なりの固有の習性に伴ひて固有的に支持具有せられて居る。狐狸などは體力が長大でないから猾智が進んでゐる、獨活うどくの大木とか、大男總身に智恵が廻りかねなどと云ふは能く現實を喟つてゐる。併し間々除外例もあるが、狐狸や蛇や墓の類が一般に

精神力に富んで居ると云つても、是にも亦除外例があつて平凡極まる動物であるのがある。動物園の管理者又は物好き若しくは皮取りの事業などで狐狸を飼養する人は、殆ど一樣に狐狸は、たゞの動物であると云ふやうに言うて居るが、其は研究の未熟または觀察の出發點に錯誤を有つて居るからである。即ち狐狸が人に檻養されて、自然の野生的奔放力を封鎖されて居ることを見逃してかゝつた觀察をして居る。世界を攪拌した獨逸のウキルヘルムも、和蘭で木挽をやつて居ると、凡夫であるではないか。本文に書いた如く、生物はその盛んな時代と否とで、精力に非常の相違があるもので、今日は狩獵が大流行だのと、山林原野の解放で、野生動物が衰運に陥つて居り、全く野獸等は長縮し切つて居る。この理は人間や神佛にも行はれる。平凡な人間でも、フト他人から崇められると、偉大な精力を發揮する事例が少くない。神佛も人間の頼つて來なくなると、頓に靈驗力を萎縮させ、その結果は荒廢の社堂になる事例も多々ある。

狐狸の盛んな時代の人間は文化に遠いことは勿論であるが、今では狀勢が反對になつて居る。反對になつた譯を知らずに、古人の經驗や傳説を一概に否定し去るのはつまらない。憑きもの現象や幽霊や念動やプランセット(占板)などに對する科學者の説明は、殆んど誤謬に満ちて居る。夫は眞劍味の研究で無い爲めに、資料までが一樣にポロ種ばかりを取扱ふことになる云ふ因縁に押されるのは已むを得ぬ。

世界の心理學者系の人々は、彼のプランセットが描く書畫詩歌などの原動力を、會坐者の潜在意識が、占板の胸を抑へて居る掌の筋肉を無意識的に蠢動させて其鉛筆の脚を歩るかせて書くのだと見做して居る。これは眞に皮想の見解たることは左のやうな實例に依ても明白である。

曾て阿波の池田の專賣支局の技師であつた中曾と云ふクリスチャンの家で愛用されるプランセットは實に俊敏なもので、天下の珍であつた。或る時、一家の人は一室

の食卓に寄て夕飯を喰べて居ると、次の室にて何か知らぬが、カサリノと音がするので、主人が起つて行つて見ると、驚くべし、室の一隅の紙片の上に放置されてゐたプランセットが獨りで紙上を躍つて、三寸計りの長けの天使の繪姿を精巧に書いて居る最中であつた。このやうな事實のあることを知らないで、輕佻な科學者が獨立した靈の存在及び憑依と云ふことを否定して、とやかくと生理的な説明を下だすのは、あさはか千萬の事である。

狐狸の人に憑くのは、その心靈(魂)が取り附くのであるが、吾等は狐狸ばかりでなく、人間の或るものも、その生體から心靈だけを自由に脱出せしめ得ることを主張する。現にその事例がある。そのやうに脱出した魂は他の生活體に憑依することが出来る。人が狐に憑て之を苦しめたもの、實話もある。現代の科學は、人や動物の心靈なるものは、その頭腦の或る科學的作用であると説いて居る。その様なものでは

狐狸の妖術のわからぬのは當然である。

彼の幽靈寫眞の如きも、靈魂體なるものを信じない人は詐瞞品だと言ふのが常套である。又思念力に依て物體を移動させ、又は行者輩が無我三昧の境地に入て自體を無意識裡に空中へ浮揚させるのは、實見者の外は到底信じ得られない怪事である。去年の夏、ワルソー大學のクルスキー教授は、自己の靈媒能力の實驗室に於て、嚴正なる立會者監視の下に、密閉した室内から俄然姿を消したが、同時にその肉體は隣接室の内に脱出してソファの上に安臥してゐた。この人は自分でも、その瞬間の意識や體感が空無になつてゐて語るよしが無いと言つてゐる。而して此超人界的怪事の理法は一切わからぬ。先づ常識的に考へると、試験室内の同教授の肉體が、瓦斯體になつて壁の氣孔内を潜り、隣室へ出づると同時に元體に還つたのであらうと想像するの外は無い。先年著者の一友人は、北海道に於て岡山市生れの老人が、襖の引手を外づしてその穴を潜つて隣室へ飛び込んだ怪奇な忍術的技術の實演を觀

た。又この老人は、坐したまゝ、體を空中三四尺ばかり浮揚させ乍ら二三回輪を畫いて舞ひ下りる藝當を村人に能く見せたと言ふ。此種の怪事から推しても、彼の墓が蓋で密封された容器から、風の子の如くに外へ逸し去ると云ふのは事實たるものと信せねばならぬ。

千里眼や念力寫眞なども、實地を知らぬ人は、そのやうな理法の存在を認めずと主張するのも、眼は物理的な精神光波を放射する樞器たるを知らぬからである。精神光波は尙ほ手の指の尖端、眉間、上唇などからも出る。狐は尾の端からも出す。狐が人や小動物を誑らかすのに、いつも尾を豎に又は水平に使ふはこの爲である。蛇の眼も彼れの精神を放射する屈強の機關である。蛇が婦女子に視線を合はすこと三四十秒間たるを得ば、大抵な女は茫乎となつて昏睡する。大蛇は視線を合せなくても人を睡らせる力がある。

猫、墓も魔性の動物であるが、狐狸とは多少その魔性の質が違つてゐる。河童も變な奴であるが、そのばけ方の性質は亦一種の特色がある。室の床下に大きい墓が住んで居ると、その室に常住する人は、必ず其精氣が衰へて病氣になると云ふ事實があるのは、墓が、人の精氣を吸ふからである。精氣は物質體の氣孔を通竄することは容易である。地球の引力が幾千萬個の重疊した物體を通過して、最上層の物體に及ぶは、是以上の現實事ではないか。

越中の國で、昔でさへ或る狐憑きが下の如き言辭を吐いたと云ふ。曰く、人間に憑いても良いことは無い、フトすると梅毒下疳などの毒を受けて困るから、追々に狐も人に憑かなくなる云々、精神と肉體とは異元であつても、密接の関係があることは誣ひ難い。エルンスト・ヘツケルが物心一元論を唱へたのも聊か據りどころはあ

狐が人を魅惑する理法の骨子は、思念術即ち暗示であるが、その暗示を有効ならしめる手段は、人間の巧みな催眠術と殆んど甲乙ないやりかたをするのがある。千葉縣の某の實地談に、或る夜、村道を歩いて居ると、突然眠くなつたところ、一二度犬の様な姿が眼前を走り乍ら通うた。スルと今度は毛箒木か獸の尾のやうなものがサツと額を一ト撫で撫でた様に思ふと、夫からは眼がくらんで仕舞ひ、前後左右墨を塗つたやうに闇くなり暫時立往生をしたとの話に對し、或る人之を評し、額を掃いたのは疑ひもなく狐の尾で、ハツと思はせて心機を一轉させて睡りを誘起させる手段は巧妙なものだ云々。

又古い話であるが、奈良の武人が或夜、下僕をつれて外出し田舎道にかゝると、突然大木の杉が二人の眼前に出現した。其杉の幹徑は一丈に及び、高さも三十間にも及ぶもので、見たことの無い大木だから、道が違つたかとも考へて見たが、違ふ筈もないので怪しと思ひ引返さうと云ふに一決した時、從僕が、後日の證據にもなる

から、一矢を射かけて置くやうに注意をした。武人は成るほどとて、携へてゐる弓に矢をはげて杉の大木を射つけて歸り、翌朝行いて見ると、大木は無く、一疋の老狐が二尺許りの杉の枝を咬へたまゝ、矢に貫かれて死んで居たと云ふことである。杉の枝を咬へて大木の杉を思念したこと、想像されるが、杉の枝には何のエネルギーも無いと云つてはならぬ。よしんば無いにせよ、其を咬へるので自ら熱心の度が著しくなるのでは無からうか。

本文所載、宮城縣の三田氏の實見した狐が、飛んで逃げるときに、ばかされて居る人間が、狐の逃げ出す方向に内俯せにノメツたのは、狐にかけられて居る動物磁氣の綱で引ツ手繰られたのである。又その狐の放射しつゝあつた磁氣の強烈なことは最初、その狐の居るのを知らぬ三田氏の片頬にチャトと電氣をかけた如き感じを與へたのでも知られる。暗示なるものを無形の思想の働きであると思ふと奇怪であるが、思想は精神の凝りて、精神は苛電性の靈素であることを想はゞ、暗示の妙力は

一向に不思議でなく、寧ろ當然あり得る現象たることに想到せられる。

◇  
狐狸など動物が人體に憑いたときに、その肉體は、安全な隠し場所に置かれてあつて魂だけが來て憑くのであるから、彼れの肉體は死屍同様、無感覺であつて呼吸も無い、換言せば、生理は中止して居る。併し遊離しつゝある魂體は糸狀の靈紐で肉體との連鎖を支持して兩者を繋いで居るので、留守居の肉體は心臟の呼動もあり脈搏も失せてはゐない。但し永くなると靈紐が自ら斷絶して肉體は生機を失して死亡と云ふ反生理現象を惹起する。この故に人に憑いた狐狸は死亡を防ぐ爲めに一晝夜に一回又は二回、その魂を肉體に戻して繋ぎを保護する必要がある。狐憑が時々常態に返るのは、狐の魂が人を離れたときの状態である。

狐狸が人に憑いたとき、もしその肉體が、犬に喰はれるとか、搜がし出されて斫られるとか、穴へ埋められるかすると、人に憑いてゐる魂の歸所が無くなるから、已

むを得ず、その人の生涯憑いて退かないのである。曾て福知山の某旅館の妻女に狸が憑いて折り／＼癲癇的現象を起すことがあつたが、その狸の言ふところには、自己は時々肉體に歸還するのであるが、その折りに此婦が癲癇を起すのだ云々と。これは普通人の想像するところと反してゐる。憑ものゝした人間の精神は、機能が萎縮せしめられてゐるから、憑ものが突然脱離をするときには倒れて人事不省で居る、これを俗人は癲癇だと言つたのだ。眞の癲癇はこの場合の癲癇とは性質が相違をしてゐる。

該狸憑きの女房は、その後、某靈能者の爲めに狸を退けてもらつてからは、一度も癲癇的現象は發しなかつた。憑物は米國の心靈研究家キャリントンもその事實を確認して、世に力説をして居る。

大正七年に、山陰道で中學卒業の某青年が、神道家に鎮魂されたときに、かねて密かに其青年に憑いてゐたクッ龜が顯現したのを見た。青年は四ツ這ひになり頸を長

く伸ばして四方を眺め廻はし、宛然龜の状態をした。後刻該青年は告げて曰く、今自分の爲した舉動は不可抗力の爲さしめるところで、衆人の前ではあるし、奇怪ではあるし、懸命に努力したけれど如何ともしがたくあつた云々。如何にも該青年は満面に朱を濺いで自ら防止すべく健闘した状態が觀取されて居た。さて又青年は何故に自己の今の怪態の生じたかを知らなかつたが、術者が貴君の今の舉動は龜である、何か龜を虐待したと云ふやうな事は無いかと問ふたら、該青年は次の如く答へた。

別に龜を虐待して殺したと云ふやうな覚えは無いけれど自分の近所に、湖水の末の河になつてゐるところがあつて、毎度手網<sup>た</sup>で魚を掬ひ捕つて遊ぶのであるが、その河にはクソ龜が澤山居つて、能く手網にかゝるので、癢に觸り、龜を捕る毎に空中へ高く投げ棄てるのが癖になつて居た。龜は投げられて墜ちて死ぬのか死なないのかは一向に心に止めたことは無いが、多い中には死んだのもあるでせう云々。

該青年は一見健康の身體を有するにも拘らず、時々精神朦朧とし、頭痛及熱發作用の爲めに惱ましめられるので、自ら不思議の感に堪えないのであつたと云ふ。

本文に、刈草を脊負うて垣間見をすると、客人が狸に見え、刈草を下ろして見ると常の人に見へるのは、草の中にまぎれ込んで居た虫除<sup>く</sup>けの百萬遍の祈禱札があつた爲めだと知れたと云ふ事例を掲げたが、是は面白い理法の説明になる。百萬遍の念佛に籠つた念力の功德が現はれたのである。物質の勢力ばかりを眞の力だと誤解した人には、此理は一寸わかりにくいであらうが、念力と云ふものは物質の力以上の効力を有することがある。郡代に化けた老狸は、暗示術を以て庄屋方の家屋内の人のみばかす力があつても、屋外の百萬遍札を脊負つた人には、暗示即ち其精神術が及ばなかつたと見るべきものである。



狐捕りの名人萬兵衛の宅を、一里餘の山奥の雄狐が、どうして知つて窺ひ寄たかは説明の要がある。野生の動物が、場所を知覺する不思議の能力者たるは、傳書鳩、渡り鳥、蜜蜂、犬、猫、馬の類によつても世人は熟知するところである。猫の如きは、全く眼を隠くして三里五里の混亂し易い未知の場所へ捨てても一夜にして元のところへ歸つて來るものがある。狐に就てはまだ誰人も實地にその超官能的知覺の試験を行つたものがあないけれど、恐らく犬よりも遙かに優れてゐるであらう、犬でも非常に俊敏なのがある。五六年前、石見國<sup>にま</sup>邇摩郡大屋村の醫師が、汽車で飼犬を京都へ運んで捨てたところ、二十三日目に瘦せ衰へ乍ら獨りで戻つて來た。どうして百何十里の山河を越えて戻つて來たか。これは動物學者などの能く言ふ本能なるものではない（本能は祖先の經驗の遺傳だなどと云はれてゐるが、マサカ右の犬の祖先は石見から京都へ旅したことがあるとは言へまい）歐羅巴の某水産學者は、海蟹を捕へて二百哩の遠地に運び、見じるしを附けて海に放したところ數ヶ月後に、

元の所に歸着したと云ふ報告をして居る。また一層驚くべきことは、鰻の幼魚が北太平洋の深海の一點から何千哩を泳いで、歐洲の北部や地中海の伊太利あたりの河へ親の遺跡をたづねて來ることである。

◇  
高所にある雀の巢に念がけた蛇が、最終日に自己の口中より小蛇を吐出して雀の巢に飛つかせたと云ふ記事があるが、現代人に評せしめば、發狂人の書いたことだとも言ふであらうが、吾らは是は蛇の如き強い執念動物は、精神力で之を爲し得ると信じたい。精神の原質が一種の物である以上は、是は可能性の下に置かれる事實と見做して差支は無い。無形無量の電子が物質を造ることを思へば毫も背理の想像ではあるまい。電氣は意識を存じないと學者は想つて居るが夫でさへも生物が出來る。活物の本源たる精神を機械的に見るは不當である。

近頃一派の哲學者間に、思想は活物なりと云ふ説が行はれて居るが、是は實證的經

驗の産んだ歸納論である。著者の郷里の某禪僧は、先年兵庫縣にて、美人の死體に纏綿して出現した破戒僧の生靈の頭を如意棒にて撲つたところ、その生靈は消失をしたが、生靈の本體は自己の居室にあつて額を破られて出血をした怪事の經驗を有つてゐる。又丹後の舞鶴町の遊廓の一妓は、或る夜雪隠にて禁厭を行ひ、自己の愛人の生靈的面貌を見得たが、驚愕の餘りに、手にした灯を落したところ、其夜若狭の小濱の自宅に居た愛人の面部に一個の火傷を生じて傷痕まで残すに至らしめた。所謂反理學、又は超科學の怪事は、現代と雖も決して少くは無い。宇宙は整然たる一個の大法の下に現象したもので、一として理法の外なるものは無い、反理學だの超科學だのと云ふは、畢竟現代の科學の幼稚を語る反語である。妖怪は存在する。

昭和二年四月十七日印刷  
 昭和二年四月二十日發行  
 定價金貳圓

著作者 岡田 建文  
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地

發行者 岡村 千秋  
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地

印刷者 沖田 瀧次郎  
東京市小石川區茗荷谷町七十二番地

發行所 郷土研究社  
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地  
電話東京二三九一七番

沖田印刷所



